第２章 インド亜大陸の多彩な自然と文化

はじめに

言い古された言葉には真理が含まれている。インドはガンジスの流れのように変わらないという真理は、大河の水面は移ろい行くが、そのことを含めても流れは同じであると理解したい。人口の増加は著しく、すでに 2016 年には 12 億 5970 万人を越えて、2023 年には中国をも抜く。商業分野でのインドの人々の活躍は世界に及んでいることは周知であろうが、これに加えて現在では情報技術の担い手として世界中での活躍が目覚しい。本書にたびたび登場する南インド、カルナータカ州の州都バンガロールは、今やシリコンバーレーとしてつとに有名である。バンガロールに拠点を置く全インド雑穀改良計画（研究所）を中心に、私は共同研究を進めてきたので、各地への調査旅行の合間の 1 年以上はここで暮らしてきた。高原に立地し、それほど暑くはなく、大まかに言えば旧宗主国イギリス風とインド風を調和させたような街並み、公園や植物園、緑地が多く、ガーデンシティとも呼ばれ整然としているかにみえる。それでも少しは混沌としているところもあり、大方にとってはまことに豊かな暮らし向きに見える。

本書はインドのバンガロール（1996 年）で構想し、イギリスのカンタベリー（2006 年）で書き始めた。しかし、職業的義務の忙しさにかまけて、前著（阪本編 1999）に少しでも何かを付け加えるには、インドの歴史も文化もあまり知らず、充分に論考を展開することができなかった。そこで、東京学芸大学の定年を機に、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のフェローにしていただき、改めてインド亜大陸の歴史や文化を学ぶことにし、南アジア学会関連の多くの研究会・セミナーなどに 6 年間ほど参加させていただいた。植物学とはまったく異なった視点から、南アジアを新たに学び、本書は思索ができる限り、加筆修正を継続する。第 2 章ではインド亜大陸をめぐる自然と文化を歴史的に概観する。

インドは第二次世界大戦後の 1947 年に独立して、J.ネルーが初代首相となったが、主にヒンドゥー教徒のインド、主にイスラム教徒のパキスタンと分離することになり、1000 万人以上が移住し、数 10 万から 100 万人がこの分離に関わる社会的暴力で命を奪われたという。翌 1948 年には M.K.ガンディーがヒンドゥー国粋主義者に暗殺された（私はこの年に生まれた）。その後もインドとパキスタンの争いはカシミールをめぐって続き、1971 年にはバングラデシュが独立、シーク教が関わるパンジャーブ、ジャムー･カシミールやアッサムの独立要求など社会的争いは絶えることがない。初めて 1983 年にデリー空港に降りた時は自動小銃を構えた兵士に囲まれ、身体検査も厳しくされたが、その後も、各地でいろいろな事件は続いている。しかしながら、訪問するたびに次第に社会が安定的に感じられるようになってきた。このような社会状況の変遷の中で、亜大陸各地の農山村を巡りめぐって、20 年ほどにわたって雑穀栽培についてのフィールド調査活動をしてきた。

自然環境と歴史の多彩さからして多様な生活様式を見てきたが、農山村はどこも穏やかな暮らし向きに思えた。これがガンジスの流れのごとく変わらないことの意味であろう。もちろん、現代を流れ行く水面には波がないわけではないし、この波間に幾多の苦難が見え隠れしていることはわかる。どこの地ともたがわず、苦難の歴史があったことは本章でさらに遡って概観してみるとしても、私は本書では自分の目で見てきた大らかなインドを描いてみたい。もとより学術書として、すべてに関して事実を踏まえるが、人のぬくもりや家畜の匂い、植物の色が感じられるように各章を書いてみたい。

私が在外研究員としてバンガロールで研究専念期間を過ごした年月（1996～1997）は雨が多く降った。たとえば、アンドーラ・プラデーシュではサイクロンまでが襲って、風水、洪水によって甚大な被害があった。ちょうど訪問した Nandyal のアワ畑はドロドロにぬかるんで、カビも発生していた。一方、隣のオリッサは旱魃で、農民は収穫を諦めて、カルカッタに出稼ぎに行くと新聞に書いてあった。

この年の 10 年前、1987 年秋にも、オリッサとビハールの調査旅行をしていた。オリッサではコドラ畑がほとんど収穫に至らず、これが畑といえるかと、あまりのひどさにショックを受けた。ところが、この時に一緒に混播（あるいは勝手に生えた）されていたコラリ（キンエノコロ）はそれでも生育して、確かな穀実をつけていたのである。これこそがこの三次起原作物の意義であり、収穫保険の役割が明瞭に示されていた。これほど厳しい自然の中で暮らし、乏しい食べ物を、本当に大切に食べること、農耕と食べることの起源（根源）に触れた気がした。

当時は全国的に 100 年来の旱魃であったとは知らず、後年知った。多くの農家は快く雑穀の種子サンプルを分譲してくれた。しかし、１・２ヶ所で分譲を拒否されたことがあった。インドの同行研究者は先住民居住地ではいろいろな問題があるからだと言っていた。今から思えば、あの厳しい旱魃で、ほとんど収穫が見込めない時に、たとえほんの少しでも、たとえ遺伝資源保存のための研究用といっても、分譲を求めたことに無理があったのだろう。当然、食料が不足しているところに来て、種子を分けてくれといえば、これに対して怒りをもつのは当たり前である。それでも、ほとんどの農家が協力してくれたのは、インド農民の心の広さによるものである。深く感謝せねばなるまい。

本書では目次に示したように基本的には自然地理的に近く、類似した特性をもつ地域を優先して各章ごとにとりまとめ、必要に応じて人文地理的に近い地域を章立てして述べることにした。特にインドは広い地域であるので、東・西・南・北の 5 区分に州と地域を便宜的にまとめてみた。また、近年、3 州が分離して新たに設けられたので、これらの州は分離前の諸州と併せて述べることにした。さらに、パキスタンなどの諸国については別章にまとめた。

「過去を再構成する最良の方法は現在の観察である」(Risley1908) という方法論にしたがって、フィールドワークを続けてきた。この言葉は anthropology または ethnology で言うことだ。Ethnobotany においても基本的な作業は、まず、フィールドワークであり、現地の環境と人々の暮らしぶりをよく観察する。次に、調査現地で植物材料と文化情報を集め、これら得た材料と情報を解析する。主には植物学の手法による実験室の仕事である。情報の文化的な部分は文献などにより比較検討を行ない、聞き取り資料の確からしさや位置づけを行う。これらのデータを蓄積し、総合的に比較考察して、栽培植物の起原と農耕文化複合の伝播を解き明かすのである。

東から西へと向かい、さらに南下した中国長江中・下流起源のイネと、西から東へと向かい、また南下したアフリカのサバンナ地帯起源の雑穀、トルキスタン起源の雑穀およびチベットからのオオムギやソバが合流して、新たにインド独自の雑穀の栽培化を含めて、インド亜大陸の雑穀を中心としたカリフ農耕文化が形成されていった。この過程で起こったことであろう次の事象に特に関心が及ぶ。1) だれがアフリカから、中央アジアから雑穀を伝えたのか。2) だれがインド起源雑穀を栽培化したのか。3) 作物起原神話はあるのか。特定の神々が、あるいは祭りと作物の結びつきはあるのか。4) 栽培や利用に関する禁忌 taboo はあるのか。興味は広がるばかりで、尽きることがない。

2.1　自然地理と環境

2.1.1　自然地理

インド亜大陸の範囲は現在の国名でいうと、インド、パキスタン、バングラデシュ、ネパール、ブータン、スリランカおよびモルジブの 7 か国である。この広大な南アジア地域は亜大陸と称するに相応しく、東西・南北ともに約 3,400km に及び、標高も 0m のインド洋から 8,848m の世界最高峰エベレストを戴くヒマラヤ山脈にまで及んでいる。西岸はアラビア海、東岸はベンガル湾、南端コモリン岬ははるかインド洋を望んでいる。

著しく多様性に富む自然環境をケッペンの気候区により概観すると、ガンジス河中・下流域一帯のヒンドゥースタン大平原は最高気温が夏至の前にある温帯寡雨ガンガ型(Cwg)、半島部のデカン高原は熱帯サバナ（Aw）気候、マラバル海・ベンガル湾東部は短い乾季を持つ熱帯モンスーン林（Awm）気候、インダス河の中・下流域は熱い砂漠（ＢWhw）気候および冬季に乾燥する半乾燥ステップ(BSｈｗ)気候、大ヒマラヤ地域はツンドラ気候(ET)、スリランカ、モルジブおよびアンダマン･ニコバル諸島（インド）は熱帯雨林（Af）気候である。

南西のモンスーンが 6 月頃から 9 月末まで優勢で、多湿で多くの雨を降らせる。10 月からは乾季となるが、南東の海岸地域は 1 月まで雨があり、またサイクロンが襲ってくる。11 月ともなるとヒマラヤ山麓など北部地域はとても寒くなる。3 月から 5 月が暑く乾燥している。モンスーンは順次、南西海岸からガンジス河のデルタ地域、ヒマラヤの麓にまで影響を及ぼしていく。サル、タケ、チークも緑の森に色を変える。ケララ州は豊かな熱帯降雨林が西ガーツ山脈の山麓に及んでおり、海岸のラグーンはココヤシ林に被われている。デカン高原にはクリシュナ川、ゴダヴァリ川、カヴェリ川などがあり、東へと流れている。カルナータカ州の多湿な地域にはサンダルウッド、チーク、シスの森林がある。東に向かうと雨の少ない赤いラテライトの薄い土壌地帯になる。南西のニルギルヒルは例外で、標高が高く、熱帯にありながら暑くはなく、豊かな森をなしている。さらに東へ、ブラマプトラ河流域に行くと、メガラヤのシロン高原を越えてバングラデシュの国境、またアッサム州やアルナチャル・プラデシュ、ナガランド、ミゾラム、マニプールを経て、ミヤンマー（ビルマ）の国境に近づく。ガンジス川とブラマプトラ川が合流するガンジスデルタはマングローブ林を形成している。反対に北には東ヒマラヤのティスタ渓谷がシッキムに至っている。

生物多様性は多彩な自然環境により、とても高い地域 hotspot である。15000 種の植物が生えている。350 種の哺乳類。9,000 頭の野生ゾウ、3,642 頭（2001～2 年のセンサス ProjectTiger による）のトラ、少ないとはいえ、これは世界のトラの約半数である。グジャラート州の GirForest 保全区のアジアライオンは数百頭いる。ヒョウ、ヒマラヤのクマ、アッサムの Kaziranga 周辺の北東林では 1 角草食獣、238 種のヘビがおり、毎年 10,000 人が毒ヘビに咬まれて亡くなっている。ガゼル、イノシシ、ガンジス河のカワイルカ、数千種の鳥類。30,000 種以上の昆虫類。ウッタルプラデシュ州の Dudhwa 公園、Corbett、マハラシュトラ州の Bandhagarh、Kanha、カルナタカ州の Bandipur など、保全すべき野生生物や自然環境が数多くある。しかし、これら野生生物の多くが減少傾向にあり、絶滅危惧種に指定されている種も多い。人々と深くかかわる植物も多様にあり、バンヤンジュ、インドボダイジュなどは聖なる木、チューベローズ、マリーゴールド、センニチコウなどは神々にささげる花々である（Lord 2004)。信仰に関わる植物については後述する。

2.1.2　環境と開発

ヨーロッパとは異なり、インド亜大陸は険しい山脈によって中央アジアと切り離されているため、中央アジアの草原地帯での何世紀にもわたる物資や人々の往来にはほとんど参加することができなかった。それでも、インド亜大陸に興亡した諸王朝は常に周辺国と交流していた。その交流はたいてい西方諸国との間で行われた。カイバル峠とポーラン峠を経由すれば、容易にアフガン高原との間を往来することができたからである。海はまたインドを海外に結びつけた。半島南端部の海岸地方を拠点とした海洋部族のチョーラの人々は、仏教やインド古来の宗教・哲学が東南アジアへ伝播する上で重要な役割を果たした。山岳と河川によって個性的な地域に切り離されていたため、それぞれの地域に異なる自然環境、言語、文化が形成された。ヒマラヤ山脈と並行してガンジス平野を流れるいくつかの川は、合流して聖なる「ガンガ」となり、北西部から南東部に流れてベンガル湾に注ぐ。「ヒンドゥースターン」と呼ばれるこの地域一帯は農業地帯である。北インドに成立した諸王朝が拠点を置いたのはこの地域であり、北西部から侵入した侵略者たちが目的地としたのもこの地域だった。1,609km にわたって広がるガンジス平野はパンジャーブ地方に及び、そこからは「五つの川」が南西へ流れてインダス川となる。ガンジス川とジャムナ川に挟まれた地域は肥沃なドアープ（両河）地域として知られる。これに最東端部でチベットから流れてくるブラマプトラ川が合流する一帯は、肥沃で水が豊かなベンガルの米作地帯である。

北インドとデカン地方と呼ばれる亜大陸半島部との間は、山岳地帯、密集した低木地帯、西に流れるいくつかの川によって隔てられている。これら中部インドの山々がヒマラヤ山脈ほど越えがたい障害ではなかったにもかかわらず、南部に定住した人々はいわゆるドラヴィダ系の言語を話し、独特の文化を育んだ。しかも、広大なガンジス平野とは対照的に、この地方の各地が渓谷、山岳、海岸沿いのガーツ山脈の断崖に遮られているために、孤立した諸国と独自の諸言語が形成された。しかし、以上のような多様性にもかかわらず、中世までには、インド文明とも言うべき統一的な文明的要素がほぼインド亜大陸全域に見られるようになっていた。

1970 年代初めにインドのヒマラヤ地方の森林地帯で、ガンディー主義者の指導の下で協同組合運動が進んでいた。彼らは農具作成のために森林省管轄下の森林を利用したい旨申請したが、森林省はそれを拒否し、伐採権を民間会社に与えた。この会社が森林伐採に向かったときに、地元の住民、特に女性は伐採対象の樹に抱きついてでも、外部業者による森林伐採を阻止するという運動を行った。この運動がチプコ（「抱きつく」の意）運動と呼ばれ、この地方のみならず他の地方にも広がり、インドにおける森林伐採をめぐる地元民と政府森林省との対立が社会的に大きな注目を集めるきっかけとなった（柳澤 2002）。

さらに、柳澤（2002）は、インドの環境と開発について整理して次のように記している。　南アジアの生態環境の悪化は、1970 年代に特に顕著になったわけではない。19 世紀のイギリスの植民地統治の時期に、イギリスの森林政策、木材需要の拡大、都市の拡大によって南アジアの森林が激減した。また、村落の耕作地の急速な拡大によって、村落周辺で低い樹木が育成していた非耕作地が激減した。

植民地化以前のインド社会には村落を基礎に村落および周辺の自然環境を維持するシステムが存在し、それによって環境劣化は阻止されていた。ところが、「緑の革命」で地下水利用の強化・灌漑農業の拡大が見られる一方、作付けは不安定化した。また、村落の非耕作地の減少は、そうした村落の力関係を変える過程でもあった。村落共同利用地の減少は、

南アジア農業にとっても必須であった家畜の飼料基盤の劣化を意味し、家畜飼育・家畜を不可欠な一部とした農業、さらに酪農業などに深刻な影響を及ぼし、逆に、家畜飼育は、森林の劣化をもたらした要因としてあげられている。丘陵・山岳地帯では、村民のほとんどが小規模土地所有農民で大土地所有者層がいない、つまり村落が社会経済的に両極に分化していない村落があり、そこでは村民が共同して合意した規則に基づいて自然資源を保全的に利用している。丘陵地では自然資源は一つの村の成員のみによって利用され、住民は一つのカーストのみからなるなど同質的であるのに対して、平地では多カーストからなり、複雑である。1960 年代央の「緑の革命」の導入以降は、耕地面積の拡大は非常に遅くなっている。「緑の革命」技術の生態的な危険性にいち早く警告を発した M.S.Swaminathan も「緑の革命は多くの森林を守った」という農業の土地生産性を非常に上昇させることによって、耕地の外延的拡大への圧力を弱めたことは確かであろうと述べている。

南アジアの急激な都市化にともなって、都市の居住環境は急速に変わりつつある。大都市の大気汚染は、旅行者さえも感じざるを得ないほどにひどい。インドの環境問題の解明に重要な貢献をしてきた NGO の研究組織「科学・環境研究センター」のアニル・アッガルワールは、環境問題ではいかなる組織も個人も間違いを犯す、持続的発展とは、環境変動の結果をいかに学習するかに焦点があり、より学習が容易なシステムこそが持続的な自然利用の組織である、と述べており、実際、環境変動がきわめて複雑な過程であり、一定の目的を目指した政策が、その目的に合致した帰結をもたらすかどうかはわからない。

ここに論じられている緑の革命の功罪はともかくとして、緑の革命が商品作物に重点を置いたことにより、丘陵・山岳地帯で主に自給的に栽培されてきた雑穀が衰退してきたことは、現代の重要課題として第 11 章で、さらに未来にむけた課題を終章で論考した。

篠田隆・中里亜夫（柳澤編 2002）は牧畜に関連して次のように述べており、要約しておく。

大きな飢饉のあった 1899 年と 1918 年の英領インドの収穫面積は前年比で 15%ほど落ち込んでいる。飢饉の影響は非灌漑地域でより顕著であった。インドでは牛と水牛が家畜の三機能といわれる役畜、用畜、糞畜の機能を主に担ってきた。すでに植民地期に、共有地が減少するとともに牧畜カーストの定着化も進行し、これにともない牛の質も劣化し始めた。19 世紀第 4 四半期から 20 世紀初頭にかけて多発した飢饉は、牧畜民にも深刻な被害を与えた。質の高い牛を再生産するためには広く草生の豊かな放牧地が必要とされるが、「ほぼすべての地域で、村に近い共同放牧場は希望のないほど過放牧されている」（BI1928：197）状態であった。放牧カースト・トライブの定着化・農耕民化は植民地期以降の共有地資源の劣化に対応する変化である。

インドの牧畜民カースト・トライブには、伝統的に牛・水牛などの大家畜を飼育したラバーリー、グジャールなどの集団と、羊や山羊など主に小家畜を飼育したバルワード Bharwad、ガッディー Gaddi、ボーティア Bhotia などの移動牧畜民集団がいる。遊牧民や牧畜民は、環境・生態を熟知し、家畜群の適正な管理、地域の環境や定着農民との生態的・経済的共生をこれまで図ってきた。しかし、牧畜民と農耕民の共生的な関係は破壊されてしまった。また、山岳部とりわけヒマラヤ地域においても、家畜、農業、林業の「伝統的」な結合を突き崩す諸力が近年強く働いている。

インドでは主に周年放牧である。それは年間を通して朝から夕方まで村落周辺の共有地や収穫後の耕地に放牧する形態である。インドでは主に限定放牧で、牧夫・牧童が家畜群を管理する。季節放牧とは、乾季に村外に長距離移動する放牧形態を指す。移動ルート沿いの共有地や収穫後の耕地に放牧し、夜は野営する。ただし、雨季には村に留まり、村落近辺で日帰りの放牧を行う。他方、

周年放牧は主にサバナ地域や高温・多湿地域に、季節放牧は乾燥・半乾燥地域に主に見られる。家畜群は、それを管理する牧夫のいるサバナ地域や乾燥・半乾燥地域の場合に大きく、高温・多湿地域の場合には小さくなる。家畜の過放牧による土地劣化・砂漠化は、多くの場合、周年放牧の弊害として論じられてきた。すでに植民地期から、インド全域で最も重要な粗飼料源を為したのは、収穫後の耕地であった。収穫後の耕地には、その耕地を専有・経営する農民の家畜のみならず、村民や外部者の家畜も放牧できた。このような刈跡放牧の慣行は、「緑の革命」の進展した過去 30 年間に大幅に変化した。無肥農業にとってこの刈跡放牧は地力維持にプラス効果をもたらしたが、「緑の革命」の進展と共に減少し、近年では多くの地域で姿を消した。

2.2　長い歴史

2.2.1　通史の概要

アフロ・ユーラシアの主なイネ科穀物の栽培化は先史時代に起こったことである。たとえば、オオムギは 12000 年前（オリエント)、コムギは 10000 年前（オリエント)、アワは 7000 年以上前（中央アジア)、キビは 8500 年以上前（中央アジア)、イネは 7500 年前（長江中下流域または珠江流域)、シコクビエは 5000 年前（エチオピア)、モロコシは 4500 年以上前（アフリカ東南部）であることが遺跡からの発掘で明確になってきている。先史時代の遺跡はインド亜大陸でも見つかっているが、穀物に関する痕跡はインダス文明のころからやっと明瞭になってくる。

詳細は後述、文献を概略引用するとして、まず、古代史の流れを概観しておく。インダス文明（前 2300 年～前 1800 年)、ヴェーダ時代（アーリア人の侵入、前 1500 年頃)、諸王朝時代（前 7 世紀頃)、マウリア朝（前 317 年頃～前 180 年頃)、クシャーナ朝（45 年～250 年頃)、サータヴァーハナ朝（デカン高原南部、前 1 世紀～後 3 世紀)、グプタ朝（320～550 年頃)、ヴァルダナ朝（7 世紀前半)、以後分立時代になり、デリー・スルタン朝（1206 年～)、ムガル帝国（1526 年～1858 年)、インド帝国（1877 年～)、インド連邦（1947 年～)、これらの歴史事象を重ねて現在に至る。

インドの最初の居住者の系譜を引く先住民 Adivasi は北東インドから南インドでタミル語を話す人々まで広い範囲に現在も居住している。彼らは後続の侵入者に追われて山岳地帯やジャングルで暮らすようになった。ドラビダ語を話す人々は先住民を、サトウキビやイネで青々とした平原から遠く離れた辺境へと追い払いながら、現在は主に南デカン高原に居住している。彼らトラビダ語諸族は、インダス文明を構成したハラッパー文化（おおよそ 2500－1600 年 BC）をもたらした前ヘレニズム文明のエーゲ海やクレタ島民に関連していたと思われる。1500 年 BC 頃に、彼らも中央アジアから侵入してきた戦士と牧夫の人々に南インドへと追いやられた。

インド・ヨーロッパ語の Sanskrit 梵語を用いた彼らアーリア人は、本来、遊牧民であったが、ガンジス平原から北インドに展開するにしたがって農村社会を形成していった。この時代に Veda が書かれている。続いて、アラブ･セム族がアフガニスタン、イランおよび中央アジア方面から 600 年 BC にかけて侵入してきた。この時のユダヤ人は香辛料貿易人になった。521－486 年 BC はペルシャ王 Darius らがパンジャブとシンド地方を支配していた。仏教とジャイナ教が発展し、321－184 年 BC に北インドを支配したマウリヤ朝のアショカ王（Ashoka　269－232BC）は仏教の保護者であった。AD319－606 年にはグプタ朝が北インドを支配していた。その後も、周辺地域からたびたびいろいろな人々がインド亜大陸に侵入し続けてきた。13 世紀に中央アジアから北インドにイスラムを信仰する人々が侵入。1526

年にはバブール Babur が侵攻し、ムガール帝国（1526－1857 年）を築き、彼の孫アクバル大帝 Akbar は北インドから南インドの一部までを支配した。

1857 年にセポイの乱を契機にムガール帝国が最終的に滅びると、イギリスの植民地支配が確立し、1947 年の独立まで続いた。本質的な原因は社会的な不平等によるが、セポイの乱の直接の発端はウシやブタの脂肪が薬莢に塗られているとの風評から起こったといわれている。ヒンドゥー教徒は神の乗り物として神聖視しているウシを食べること以上の罪はないと信じており、また、イスラム教徒はブタを不浄な物として触れることさえしない。風評の真偽に関わらず、1857 年 5 月 10 日に、デリー近郊のミーラット Meerut に駐在していたセポイが反乱を起こして、デリーへと行軍した（Lord 2004）。

インドの現代史は後になって知ったことで、この Meerut には 1983 年に初めてインドを訪れた時に行ったことがありながら、当時は知る由もなく、歴史的場所への感慨を抱くこともなかった。これから概略を引用するインド古代史研究の佐藤圭四郎（1998）は第二次世界大戦中にインド国民軍とともにビルマ戦線に従軍し、敗戦後、英印軍の指揮下に入って約一年間サイゴンの警備に従い、インド人と接触する機会をもったと述懐している。

2.2.2　古代史の概略

インドの古代について詳細な通史が佐藤（1998）によって描かれているので、学びを広げる便宜のために、次に要約して引用することにしたい。

インド北東部の各地で発見された考古学的遺物によって、インドに旧石器時代の文化が発達していたことが知られる。これらの旧石器は普通石英を用いているため、インドの旧石器人は石英岩人とも呼ばれている。かれらは土器をつくることも火の使用法も知らず、野獣の肉、野生の果実、野菜などを食べていたと推測されている。

新石器時代に入ると、その遺物はほとんどインド全土から発見されている。これらの新石器人は、土地を耕作して果樹や穀類を植えることも、ウシやヤギなどの家畜を飼養することも知っていた。また竹や木を擦って火をつくることも、ろくろをつかって土器をつくることもできた。新石器時代における原住民の後裔は、ヒマラヤ、ヴィンドヤ、チョタ・ナグプル、ガーツなどの山地の深林中に現在も生活している。カルカッタの西のサーンタル族、オリッサの山地のコンド族、中部インドのゴンド族などがそれである。なかでもチョタ・ナグプルに住んでいる 300 万人のコール族は有名だが、かれらの代表的な言語であるムンダ―語は、現在インド人が使っているアーリア語やドラヴィダ語とはまったく違っていて、モン・クメール語と近い関係にある。しかし、新石器時代に全インドに分布していた原住民は、その後インドに侵入してきた諸民族によって、山地や東方へと追われたのではないかと推定される。

インダス文明はモヘンジョ・ダロやハラッパーを中心に展開した、きわめて高度な金石使用の都市文明であった。ほぼ前 3000 年を中心として、その前後約 500 年にわたってインダス河流域に栄えていた。インダス文明の遺物のうちにみられる彩色土器は、西は南ロシアから東は中国におよぶ彩色土器文化圏に属するもので、とくにトルキスタンのアナウとイラン西辺のスサにおいて、石器時代の終わりから青銅器時代のはじめにかけて作られた彩色土器の文化と関連をもっている。

古代インダス文明の遺跡からは、しばしばオオムギとコムギが発見されている。このことから、穀物が主要な食料となっていたことが想定される。このほかナツメヤシの実が食用に供されていたから、農耕地や果樹園もこれらの都市に付属していたものと思われる。さらに出土した動物の骨から、家畜としてはウシ、スイギュウ、ヒツジ、ゾウ、ラクダがあり、ブタとニワトリは、家畜か野生か不明である。これらを飼育する放牧地があったのだろう。

今日この地方の雨量は年平均 150 ミリ以下で、極度に乾燥した荒蕪地であるが、これらの都市の栄えていた時代には、いまとは気候も環境もちがっていた。雨量も現在より多く、樹木も繁茂し、季節による寒暑の差も今ほど極端ではなかったようである。農耕、牧畜と同時に、狩猟、漁撈もまた行われていた。インダス地方を含む内陸アジアをおおった気候帯に著しい変化があったことは確かなことである。

丘をめぐる水流は時代によって変遷しているが、メソポタミアの都市国家を典型として、これらから類推してみると、当時の都市は食料を自給するために農耕に適した河辺の地を選ぶと同時に、毎年定期的に襲ってくる洪水の害を避け、また山間砂漠からの略奪者の侵入や都市国家相互の戦争にそなえて丘の上に造営されるのをつねとしているから、おそらく池溝や運河が農耕地の間を縫って掘られ、河流から水がひかれて灌漑が行われていたものと思われる。

金は古来インドにおける金の主生産地である南インド（ハイデラバード、マイソール、マドラス）から輸入されたものと思われる。モヘンジョ・ダロやハラッパーにおける金の品位が南インドのそれと同じ品位であること、南インドのニールギリからきたにちがいないこの地方の特産である緑色のアマゾン・ストーンが遺物に含まれていること、などによって、両地の間に交通のあったことが証明される。インダス人たちの最後は悲惨なものであった。モヘンジョ・ダロでは、老若男女の遺骨が街路にも屋内にも散乱していた。しかも遺骨には、武器による傷痕が歴然と残っていたので、外敵の侵入による大規模な虐殺があったのではないか。

新石器時代の先住民に続いてインドに移住してきたのはドラヴィダ族であった。おそらくバルチスタンから、ボラーン通路または海岸沿いにインドに移住したのであろう。西からインドへ入る重要な通路であるバルチスタン山地に、こんにちも居住しているブラーフーイ族の言語がドラヴィダ語から出ていることが言語学者の研究によって明らかになったからである。ただし、ブラーフーイ族がトルコ・イラン系の言語が用いられているバルチスタン地方で、ただひとつだけドラヴィダ語系のことばを話す部族として、いわば言語の孤島としてとり残されるようになった事情については、はっきりしない。

ドラヴィダ人はシュメール人と人種的な型が似かよっていることによって、現在では西アジア説が有力な支持を得ている。そしてブラーフーイ語の残存するバルチスタンは、シュメール、エラム両文化圏に近い。こんにちドラヴィダ人と呼ばれている人びとの人種的特徴は、インド土着のムンダー種族をはじめとする原始オーストラリア系の原住民との混血によって変化しているため、これをそのまま 5000 年前のドラヴィダ型とみなすことは不合理だが、なおそこに基本的な人種的特徴の類似があることは否定できないであろう。したがって人種的にみれば、ドラヴィダ人の祖先は、西アジアからバルチスタンを通ってインドに入ったということができそうである。

西方のエラム、シュメール文明の一支脈であるインダス文明は、やはり西方出身のドラヴィダ人がつくり出した文化であろう。インダス文明の遺物とオリエント地域における考古学的遺物との比較の結果、インダス文明の年代をほぼ前 2500 年から 1600 年の間に定めることが可能となった。さらにオリエント資料を有機的に総合して広い視野から俯瞰すると、前 2000 年から数世紀にわたって西は小アジアからオリエント一帯に、東はイラン北部からバルチスタンにおよぶ広大な地域にわたり、アーリア系諸民族の大きな民族移動の波があったことが確かめられる。インド・アーリア人のインド侵入も、この民族移動の一環とみなし、これを前 17 世紀ごろと推定すると、インダス文明の下限と一致する。このようにして、『リグ・ヴェーダ』にみえるインド・アーリア人が破壊した城塞都市による原住民こそは、インダス文明を築いた人々に他ならない、とする注目すべき仮説が生まれるようになった。

このインド最古のことばであるヴェーダ語と、イラン最古の古典語であるアヴェスタ語、および

ベヒストゥーンのダレイオス一世碑文に始まるアカイメネス朝歴代碑文にみえる古代ペルシャ語をくらべ合わせると、両者の言葉がまったく近い関係にあることがわかる。しかもインドの『リグ・ヴェーダ』とイランの『アヴェスタ』を比較するとき、このふたつの文献にあらわれている神々の名称や祭祀の術語はいちじるしい共通点を示している。比較言語学は帰納的にこのインドとペルシャの共通の祖先であるアーリア人を推定し、この民族が用いた言語をインド・イラン語、または原始アーリア語とよんでいる。

イラン系アーリア人が南ロシアに居住していたことは、地名、固有名詞に基づいてすでに明らかにされている。インド・アーリア人の祖先も、イラン系アーリア人とともにかなり長年月にわたってこの地方に居住していたことが、ほぼ確実である。インド・イラン語族がバルト・スラヴ語族と近い関係にあることや、フィン・ウグリア語族のうちにその痕跡を残していることなどによって、この事実は証明される。『アヴェスタ』および古代ペルシャ語碑文の言葉を特徴づけている音声上の変化が起こったとき、イラン人とインド・アーリア人の二支流に分かれ、イラン系アーリア人は東部イランからメディア方面に定住し、インド・アーリア人はアフガニスタンを経てパンジャーブに移住したものと認められている。

ヒッタイト王国の公文書が発見され、それらの文献にみられる数詞と馬の調教に関する名詞がサンスクリット語の単語に大変近いこと、また、前 14 世紀のなかごろにヒッタイト王とミタンニ王のあいだに結ばれた条約文のなかに、この同盟の守護神としてあげられた神々の名が、インド最古の記録にある神名に一致することがわかった。それは前 17 世紀ごろ北インドに侵入したインド・アーリア人のそれ以前の動きを知るうえに有力な手がかりをあたえるものだからである。古バビロニアのハンムラビ王の歿後にアッカド王国に侵入し、約 500 年間にわたって（前 1746～前 1180 ころ）バビロニア全土を支配したカッシト人は、元東方ザグロス山系からおこった山岳種族であるが、かれらの君主や神々の名称は、やはりアーリア系のものである。

『リグ・ヴェーダ』には粒穀（ダナー）および禾穀（ヤヴァ）という記載がみえるだけで、具体的にどのような穀物が栽培されていたのか明確でない。ヤヴァは本来長い草を意味する言葉だが、のちの時代にはオオムギをあらわすことばとしてつかわれていることからみると、当時、オオムギがもっぱら栽培されていたものとおもわれる。コメ（ブリヒ）は『アタルヴァ』および『ヤジュル』の 2 ヴェーダに初めてみえ、コムギの栽培はさらにあとの時代のことになる。当時のインド・アーリア人の経済生活のなかでもっとも重要な比重を占めていたものは、いぜんとして牧畜で、農業は二次的なものにすぎなかった。新鮮な牛乳はオオムギの粒や、オオムギの粉と混ぜて濃い粥に煮られた。乳脂をすくいとってバター（グリタ）もつくられたが、それは『リグ・ヴェーダ』では、人間と神の享受する最高の嗜好物と讃えられている。

後期ヴェーダ時代（前 10 世紀ころから前 7 世紀末までの約 300 年間）に、アーリア人はこの地方｛パンジャーブ地方からサラスヴァティ―川流域に至る地域｝に定住してのち、500 年余りのあいだに、あるものはさらに東方にむかってガンジス上流地域へ移住し、またあるものは南にむかってヴィンドヤ山脈に到達したものと思われる。

ブラーフマナ時代（前 7 世紀～？）には農業や牧畜にも進歩がみられた。多くの種類の穀物が挙げられている。そしてヤヴァはここではオオムギをあらわすのに使用されている。コメは栽培のもの、野生のもの、ともに多量に消費されている。コムギ、エンバク、マメ、ゴマをはじめ、各種の穀類が栽培され、「ターイティリーヤ・サンヒター」に、それらの穀物の季節がしるされている。オオムギは今日と同じく冬に種が播かれ、夏に成熟する。イネは雨季に種を播き、秋にとりいれる。マメとゴマは夏の雨季に植えられ、冬および寒季に成熟する。農民はいまと同じように、たえず襲ってくる困苦と戦わなくてはならなかった。モグラは種子を破滅させ、鳥や野獣は若枝をそこない、

旱魃と豪雨は収穫を皆無にするものとして怖れられた。『アタルヴァ・ヴェーダ』には枯凋をまぬがれて豊穣な収穫を得るためのおびただしい呪文がしるされている。

前 7 世紀よりも前から、主にペルシャ湾を経由して行われた商取り引きを通して、のちのパールサ地方とインドの間に交渉があった。そして前 6 世紀になると、西アジア世界で最高主権を握っていたペルシャ帝国が、キュロス（在位前 559～529）の治世に起こった戦役によって、インドと直接の接触をもつようになったことが知られている。東部イランの大部分、とりわけバクトリアの諸地域を併合したのち、現在のアフガニスタンおよびバルチスタンにあたる地域に出征し、インド辺境に迫っていたことは確かである。しばらくペルシャの勢力下にあったインドは、前 4 世紀、アレクサンドロス大王の侵入をこうむることになる。カーブル峡谷に住むインドの諸部族を征服しながら、しだいに東に進み、前 326 年の春にオーヒンドゥーにおいてインダス河をわたり、パンジャーブ地方に入った。大王によって始められたインドとギリシャの接触は、そのために停止することなく、セレウコス王朝やバクトリア諸王を媒介として、両者の関係はつづけられた。これらの諸国はアジアに移植されたヘレニズムの遺産を相続したが、これを通してインドとの接触がたもたれた。ギリシャ人の行くところには都市が成立し、都市のあるところにはギリシャ文明が根をおろした。イラン地方からヒンドゥークシュ山脈にそって、またソグディアナからインダス流域にかけてアレクサンドロス大王が築いた都市のうち、メルヴ、ヘラット、カンダハルなどの重要な都市がある。

マウリア朝は、前 317 頃、チャンドラグプタによって築かれた。アショーカ王の碑文によれば、インドに最初の大統一を実現したのである。それまでインダス流域を含む西北インドは、政治、文化のうえでむしろ西アジアの一部とみるほうがしぜんでさえあった。またヴィンドヤ山脈から南の地方は、文字どおりダクシナパタ南の国として、悪霊が住む未知の世界と考えられていた。いまや、その西北インドはヒンドゥークシュ山脈という天然の国境線によって西アジア世界から切りはなされ、インド世界のうちにつつみこまれたのである。またカリンガの征服によってデッカン高原の大部分に直接間接にマウリア帝国の支配がおよぼされることになった。西北インドのガンダーラ地方で、アショーカ王の王子が太守に任ぜられ、この地の首都タクシャシラーに駐在した。ガンダーラ地方は北方の中央アジアや西北方の西アジアから異民族がインドへ侵入してくる国境地方であって、軍事の上で最も重要であるばかりでなく、繰り返し反乱が起こる不穏な地域だったので、マウリア帝国としてはとくに重要視しなければならなかった。

首都パータリプトラからバクトリア、中央アジア、およびオクスス川への通商路がひらけていた。貨物はオクスス川をくだってカスピ海から黒海に至り、そこから地中海世界へと輸送された。他の通商路は、パータリプトラから一層南寄りの方向を取って、商業の一大中心地ウッジャイニーに至り、そこからアデンやペルシャ湾に航海する船舶の大海港ブローチに達した。インドにおけるギリシャ人の勢力を覆してこれに取って代わったインド・スキタイ人とはどのような民族か。スキタイ人は古くからカスピ海の東に住んでいて、イラン高原へ南下する勢いを示していた遊牧民族である。前 155 年ごろに、スキタイ人の一部はバルティア領内に深く侵入し、ヘルマンドの流域に定住した。前 129 年ごろになると、南下した月氏がバクトリアを征服したため、この地を支配していたスキタイ人は、ヒンドゥークシュを越えてさらに南下し、ガンダーラ地方からカシュミールに入り、さらに各地に分散した。前 100 年ごろに、スキタイ人に属するサカ族の集団が、あらたにヒンドゥークシュを越えてカーブル流域に南下した。

クシャーナ朝、カニシュカ王の首都はペシャワールに置かれた。マウリア帝国崩壊後の北インドの混乱期と、クシャーナ朝の北インド支配の時代に、南インドに強大な国家をつくっていたのが、アーンドラ王国である。デッカンとは、サンスクリット語で南の国を意味するダクシナパタのなまったもので、ナルバター河以南の高原地帯をさしている。デッカン地方は、古代においてはほとん

ど通行が不可能な密林によって、北部インドから切り離されていた。デッカン地方の支配者として、確実な史料で知られる最初のものは、ドラヴィダ種族に属するアーンドラ族である。ドラヴィダ（タミル）というのは、もと一種族の名称であった。それがのちにタミル人ばかりでなく、これと同じ諸種族をも含めた総称となった。さらにこれらの諸種族が使っているタミル語、マラヤラム語、テルグ語、カナラ語などを総称してドラヴィダ語といっている。そして古いタミルの伝承は、パンチャ・ドラヴィダム（五つのドラヴィダ人の地方）について述べていて、それはタミル、アーンドラ（またはテルグ）、カナラ語の諸地方、およびグジャラートであると考えられている。

前数千年というきわめて早い時代にインドの大部分には、程度の違いこそあるが今ドラヴィダ人として知られている暗黒色の人種が住んでいた。この初期の人々は「原初ドラヴィダ人」と呼ぶのが適切であろう。時代が下って、これよりも文化の高い、スキタイ人の言葉と同語族のことばを話す違った人種が、北方または西北方から、おそらくバルチスタンを経由して、しだいにインダスの平原に進み、それからさらにヴィンドヤ山脈を越え、その南の地方へ落ち着いた。この人種は「前期ドラヴィダ人」と呼ぶべきものである。彼らは行き着くところどこでも、程度の違いはあるが先住民と混血した。この結びつきから、歴史上に現れるドラヴィダ人が生まれたが、彼らは原初ドラヴィダ人の肉体的特徴をほとんど残していない。

ヴィンドヤ山脈の南の諸地域における前期ドラヴィダ人の諸種族は、その多くが原初ドラヴィダ人の言語を取り入れた。現在タミル、カンナダ、テルグなどのドラヴィダ系の諸語が用いられている諸地方である。ところがグジャラートではアーリア人の移住の波によって、ドラヴィダ人の血液と言語は次第に表面から消えて見えなくなった。マハーラーシュトラでも、同じくアーリア人の影響によってドラヴィダ語は跡形もなく消えてしまっている。同じことがカリンガ（今のオリッサ、およびチルチャールの一部）でもみられる。そこでは、ドラヴィダ語に属するテルグ語がわずかに南部の諸地域に生き残っているだけである。

アーンドラとは現在のテルグ族のことであって、今なおインド東海岸のゴダーヴァリー、クリシュナー両川の河口に近い中間地帯に生存している。マウリア朝のはじめ、アーンドラは有力な王国で、人民はその王に歩兵 10 万、騎兵 2,000、ゾウ 1,000 頭を差し出すことができたと伝えられている。アショーカ王の時、一時マウリア王朝の宗主権を認めたが、王の死後、その独立を回復し、北にむかって領土を押し広げた。28 年ごろ、アーンドラ王はマガダに攻め入り、この地方を支配していたカーンヴァ朝を滅ぼしたと言われている。それから後のアーンドラの王たちは、いずれもシャータヴァ―ハナの出身であると名のっている。{シャータヴァ―ハナ朝、前 1 世紀から後 3 世紀}

シャータヴァ―ハナは、もとデッカンの西部に根拠をもった種族であるが、西方に勢力をふるったサカ系のクシャトラバ（サトラブ）に圧迫されたため、やむなく東方へ移住し、アーンドラデーシャを領有するようになって、アーンドラと呼ばれたという。北インドおよびベンガル湾方面との通商の中継地はタガラやパイターンであって、ガート山脈を越えて良好な道路がこの国内取引市場に通じていた。パイターンは「マハーラーシュトラの輝く宝玉」といわれ、マラーター地方からグジャラート、マールワーなどの北部インドに至る通商の要地であった。香料の大集散地は、インドの西海岸の諸港であって、その多くがアーンドラ王国の領内にあった。

アーンドラ朝が衰えて、広大な領土が分裂し、各地に小王国が分立したが、6 世紀の終わりに、強大なチャールクヤ朝（西チャールクヤ朝）によって統一された。チャールクヤ族の祖先はもとイランからパンジャーブ地方に入りこみ、さらにデッカンに移住したグルジャラ族であったようである。

デッカンのさらに南には、タミルと呼ばれる南インドがある。この地域はタミル・アガム（ドラヴィダ国）と呼ばれ、クリシュナ河の南にあって、独特な文化をもっていた。このタミル国の北の

境界線は、西はマヘから、東はマドラスの北方ほぼ150キロのヴェンカタに引いた線である。デッカンの連山と森林によって、北方のアーリア地方とは分離されていて、その言語も北方とはまったく違ったものである。古い時代には、タミル語がこの地域全体の言葉であって、マラバール海岸地帯のマラヤラム語は、まだ母語のタミル語から分かれていなかった。

現在残っている記録によってたどることができる最古の時代には、タミル地方は、マラバール海岸のケーララ（別名チェーラ）、南部のパーンドヤ、東部のコロマンデル海岸のチョーラの三王国に分かれていた。コロマンデルとは、チョーラ・マンダラム（チョーラ国）のなまったものである。タミル国もまた海外貿易によって大いに富んでいた。彼らの土地は、香料、とくにコショウを産し、その外綿製品、宝石、真珠、黄金などを産し、西方諸国はそれらを熱心に買い求めた。前800年ごろ、すでにユダヤ王ソロモンは自己の宮殿を装飾するために、象牙、サルおよびクジャクを獲得しようと船舶を南インドへ派遣している。

前309年ごろ、北部インドのジャイナ教徒の一団は、バドラバフという指導者の下に、マイソールのスラヴァナ・ベルゴラに移住し、そこに根拠を置いた。ジャイナ教は南インドに早くから流行していたのである。前259年にアショーカ王は、仏教の布教使を遠くタームラバルニー川に至るまでのパーンドヤ族、チョーラ族、ケーララプトラ族のもとに派遣した。1 世紀においても、南インドは北インドのアーリア文化の影響を受けることが少なく、とくにバラモンの教えは優勢なジャイナ教派の勢力に阻まれたため、ドラヴィダ社会はまだバラモンの種姓制度の軛によって束縛を受けることがなかった。紀元前後にタミルがひじょうに繁栄したのは、主にローマ帝国との貿易によって多くの利益を得たからである。前 27 年にアウグストゥスが初代ローマ皇帝となり、ローマ人は地中海世界の支配者となった。エジプトがローマ領となったことは、インドとの通商を著しく発展させることになった。貿易の中心はアレクサンドリアで、ローマの商人はここからアデンに行き、アデンから季節風を利用してマラバール海岸およびセイロンに達した。プトレマイオスの地理書にある南インドの地理についての知識が、北インドに比べて、はるかに詳しく、また正確であることも、このような密接な関係を南インドがローマとのあいだにもち続けたことを示している。タミルの諸王は自ら海軍力をもち、その船舶はベンガル湾を横断して、セイロン、ビルマ、ジャワ、スマトラなどと通商した。4 世紀になると、南インドの歴史に大きな役割を果たすパルラヴァ王朝が出現した。この王朝は、7 世紀初めから 8 世紀中ごろまで、南インドを支配し、大きな勢力をふるった。

5 世紀半ば、中央アジアから南下してきた剽悍な遊牧民族であるフーナ族が、防備の手薄な北西国境からインドに侵入してきた。フーナ族というのは、これに先立って、カスピ海の東からイランの東部に入りこみ、ササン朝の東境であるホラーサーンを支配したエフタル族のことで、中国の史料に、エフタル嚈噠と記されているものである。

ミヒラクラはマールワーを攻略し、マガダに侵入したが、この地域の王バラーディトヤのために東進を阻まれ、カシュミールにしりぞいて、この地の主となった。582 年に、マールワーのヤショーダルマンの指揮するインド王侯の連合軍のためにうちやぶられたフーナ族は、グルジャラ族という近親部族とともに、ラージプターナのビーンマールに王国を建設し、カナウジとバローチに勢力を伸ばした。また彼らの一部はグジャラートに侵入した。このササン朝に代表されるペルシャ社会は、7 世紀中ごろ（642）、アラビア系イスラム教徒に征服され、またグプタ朝に代表されるインド社会を代表した北インドのラージプト諸王朝は、12 世紀末（1191）に、トルコ系イスラム教徒に征服される。こうしてイスラム文化が西アジア全域からインドをおおうことになるのである。

2.2.3　近代・現代史の概略

メトカーフ・メトカーフ（2002）によって書かれたインドの近現代史を農業や農村に関わる記述を中心に、次に要約しておきたい。彼らは、ムガル帝国時代から英領インド時代―18 世紀後半から、インド亜大陸がインドとパキスタンという二つの独立国に分裂する1947 年まで―を経て共和国インドとして現代にいたるまでのインド史概論としてまとめている。彼らは、常に歴史的変化の最大要因となる政治の流れと社会的エリートの行動を中心にして本書を書いた。そのようなことに重点を置けばインド史における大半の人々の多様な精神性と生活体験が不当に扱われることになると、現地の「民衆」（サバルタン）レベルでの出来事だったという、サバルタン研究グループから批判されるだろうと述懐している。その上で、食物や耕作地から子供の将来にいたるまで―否応なく政治に支配されていたことを決して忘れてはならない。イギリスの植民地主義者たちが、植民地主義を正当化するために、「進歩」したイギリスと対照的な時間のない悠久の国というインドの歴史をぜひとも作らなければならなかったし、一方、インドのナショナリストたちが、インドの文化と政治思想は古代から不変の理念に基づいているというインド史を創ったことも政治的事象であったと強調して本論の記述を始めている。

ムガル帝国は、1526 年に、デリーを都としたアフガン人のムスリム王朝「ローディー朝」は、デリー西北のバーニーパットの戦いで、見事な軍略と鉄砲の威力にまさるザヒール・ウッディーン・モハンマド・バーブル（1483～1530）の軍門に下った。ムガル人皇帝たちは、それまでの王朝のスルターンたちと同様、さらに農業改革、軍事力強化、国内統一を推進した。バーブルは父方ではティムール、別名タメルレイン（1336～1405）、母方ではモンゴルのチンギス・ハーン（1167？～1227）の子孫だった。19 世紀以来、これらの支配者たちがアラビアなまりで、モンゴル人を意味するムガル人と呼ばれていることは歴史の皮肉である。バーブルは当初、失われた父祖の土地サマルカンドの奪回を願ったが適わず、サマルカンドの代償としてはあまりに貧しいとは思いながらも、北インドの平原地帯ヒンドゥースターン征服へと方針を転じた。ムガル人の王朝を一大帝国にまで拡大したのは、フマーユーンの息子のアクバル帝だった。アクバルは半世紀にわたる統治期間中に幾多の征服をなしとげ、ムガル帝国の領土は北はカーブルとカシミールまで、東はベンガルとオリッサの湾岸地帯まで、南はグジャラートとデカンの一部まで、さらに最も重要な地域であるデリー南西のラージャスターンまで広がった。

ムガル帝国期の農業研究によれば、耕作農民は土地の所有者ではなかったために土地を売ることはできなかったが、所定の税を払えば家代々使用することができた。しかし、権力者たちがたえず農民を抑圧・搾取したために、17 世紀以降、農村情勢がしだいに緊迫し、強制的な税の取り立てのために一揆が続発して帝国を揺るがし、ついにはその没落へと向かわせた。新たに勃興してムガル帝国に反乱したマラーター勢力はゲリラ戦法を得意とし、丘の上に戦略的要塞を築いている恐るべき敵だった。アウラングゼーブ軍は 1685 年にビジャープルを、1689 年にはゴルゴンダを征服し、デリーから遠く離れた各地を転戦し続け、軍とともに宮廷も、都市までも移動した。

いわゆるアメリカ新大陸発見を契機として、新しい植物品種がもたらされ、ヨーロッパ人たちが付加価値の高い産物を求めたために、17 世紀のアジア諸国の経済は活況を呈した。ムガル帝国を含め、アジア諸国の経済は貨幣経済化が進み、需要に対応する換金作物が盛んに栽培されるようになった。インドの海上交易はたいていアラブ人に主導権を握られ、16 世紀の初めからはポルトガル人に支配され、17 世紀になるとイギリスとオランダの貿易会社が居留地をインドの沿岸地域に建設した。

マラーターも、ジャート族も、そしてラージプートさえも、名前は昔と同じだが、いまや新しい特徴を備えて団結した社会集団であった。彼らはすでに古いインドの「カースト」によって規定さ

れてはいなかった。当時の碑文その他の研究による最近の学説によれば、意外なことに、サンスクリットのヴェーダによる基本的四階級は、今からわずか数世紀前まで、インド亜大陸の多くの地方の社会制度とあまり関係がなかったという。同様に、いわゆるサブカーストも社会制度とはあまり関係がなかった。しかし、就業している職種と過去の経歴は、英領インド期以降の歴史家が考えたよりはるかに重視された。サンスクリットの階級制を重視し始めたのは、ムガル時代の野心的な君主たちだったと思われる。彼らは成り上がり者の「クシャトリア」であった。それまでは農民や兵士は職業と居住地域がサンスクリットの階級制でゆるやかに規定されていただけだったが、君主たちがそこに新しい意味を付け加えて、階級制を強化したのである。

デカンでアウラングゼーブに手を焼かせた反乱軍の首領シヴァージー（1630～80）はもともと耕作農民で、西インドでマラーターまたはカンピスと呼ばれていた家系の出だった。彼はラージプトを装って、敬虔なバラモン教師を雇って教えを受け、クシャトリアという階級は生まれではなく行動によって決まるという考え方を認めるバラモンを探し出し、自分が正当な武人の子孫であることを公認させ、その儀式を行わせる。こうして 1679 年、シヴァージーはバラモンに盛大な即位の儀式を行わせて王位につき、それまで家系にこだわらず専門的な技能の持ち主や忠臣を重んじてきたにもかかわらず、王となった後はカーストとサブカーストを国の制度と儀式において重視した。

イギリスによって植民地化される前のインドでは、ヒンドゥーとムスリムは決して自意識過剰な宗派集団として対立してはいなかった。また、自給自足する村落、硬直したカースト制度、沈滞した国といったインドのイメージが生じたのは、インドがイギリスによって植民地化された後だった。インドでは 17 世紀までに貨幣化が進み、繊維産業が発達した。世界の多くの国と同様、インドもまたタバコ、トウモロコシ、コショウなどの「新大陸」産の作物を栽培した。

18 世紀前半になると、ムガル帝国の権力は弱まり、かつてムガル帝国に支配されていた諸勢力が勃興した。そして、それらの一勢力に過ぎなかったイギリスの貿易会社が、18 世紀の終わりまでには、自らインド亜大陸を支配する体制を固めることになる。

ムガル人による中央集権的支配に反抗し帝国解体を促した第一の要因は、新興のザミンダールであった。ザミンダールはもともと地方を拠点とする豪族や部族の族長で、地方の情勢につうじ、耕作農民を支配していた。彼らは地方が繁栄を享受した 17 世紀に富を蓄えて権力を強化し、ムガル政権からその地位を認知され、政権内の地位を与えられることさえあったが、アウラングセーブの死後には北部・中央インド一帯で帝国支配に反乱した。彼らはめったに共同作戦をとらず、族長たちはたいてい地方の領土をめぐって対立していたが、一定期間団結してムガル支配に反抗し続けた勢力もあった。そして、その中の三大勢力が、中央インドのデカンを拠点とするマラーターと、敬虔な宗教集団から反ムスリム軍事集団に変貌したパンジャーブを拠点とするスィク教徒、及びデリーの南島、アーグラー周辺を拠点とする農民カースト、ジャート族の軍事集団であった。

アウラングセーブを継いだ老齢のバハードゥル・シャー（在位 1707～12）に対し、バンダ・バハードゥルに率いられた農民を主とするスィク教徒が大規模な反乱を起こした。スィク武装集団は、マラーターと同様、数世紀にわたってムスリム王朝と影響しあいながら形成された勢力であった。スィク教の初代教祖グル・ナーナクは、無形の神への信愛を説き、位階と権力からなる世俗的社会を否定した。ところが、彼の後を継いだスィク教のグルたちは三代にわたってアクバルの保護を得、その間にアムリトサルを拠点とする事実上の自治国をつくりあげ、精神的な権威のみならず世俗的な権力をも得ようとし始めた。

1748 年と 1757 年には、アフガン王アフマッド・シャー・アブダリー（在位 1747～73）がデリーへ侵攻した。当時の彼の領土は、バルチスタン、マクラン海岸、スィンド地方およびパンジャーブ地方のかなりの部分にまで広がっていた。さらに、アフガン系のロヒラ族とアーグラー地域のジャ

ート族のザミンダールというデリーのすぐ近くの勢力までがデリーに反旗をひるがえした。18 世紀半ばのデリーと大部分のパンジャーブ地方は、まさに混乱と混沌の極みに達していたのである。

1772 年、ついにイギリス東インド会社の取締役会はベンガルの政治的混乱と財政破綻に決着をつけることを決意し、ウォーレン・ヘースティングズ（ベンガル総督在任 1772～84）を同社のインド領の初代総督に任命した。19 世紀の最初の 20 年間は、インドとイギリスとの経済関係が構造的に変化した時代でもあった。東インド会社は、インドを統治し始めた後も数十年間にわたって商業活動を続け、イギリス市場のためにインドの産物を調達し、蘇生の綿布やアヘンなどの新市場を中国で開拓した。アヘン貿易は特に高収入をもたらした。アヘンは、栽培者に前金を支払って計画的に製造され、東インド会社からイギリスの貿易会社に買い取られ、中国へと密輸された。このアヘンによる収益のおかげで、東インド会社は常に不安定な財務を維持することができたばかりでなく、中国産の茶やその他の国の砂糖やチョコレートをなどのぜいたく品―消費市場の成長とともに、イギリス国内でそれらの商品に対する需要が急増していた―の輸入代金として、銀を輸出する必要がなくなった。1830 年代までには、アヘン貿易による収益はインド政庁の歳入の 15%に達していた。

19 世紀になると、産業革命によって勢いづいた商人たちが東洋の新市場を求め、東インド会社の貿易独占に反対し始めた。世論に敏感なイギリス議会は、1813 年にはインド貿易から、1833 年には中国貿易から、東インド会社から独占権を取り除いた。イギリスとインドの貿易バランスが大きく変化したのは、ちょうど同じ時期であった。すでに 1815 年までには、イギリス国内でも世界市場でも、インド産の繊維製品その他の手工業品はイギリスの機械生産による商品に太刀打ちできなくなっていた。それから数年もたたないうちに、イギリスの繊維製品がインド市場にあふれ、インド経済の典型的な植民地経済化が始まった。こうして、以後 1920 年代までの 100 年間、インドは原材料を輸出し完成品を輸入する国であり続けた。

資本主義の世界市場を相手にするには、インド経済はあまりにも微力で未熟だった。イギリス人居住者たちはインドで貯蓄した金をインドに投資するどころか、たいてい安心できる東インド会社の社債にして本国に持ち帰った。しかも、東インド会社もまた、本国費という名目で職員の年金、利子支払準備金、会社施設の維持費をインドで得た収益から差し引いた。これらはまさにインドからの富の流出であった。

1820 年代後半から 1840 年代を通じて、インド経済は厳しい不況に見舞われ、ルピーの価値は低落し、銀の供給量が減少した。東インド会社が軍と行政の維持のために不可欠の地税を現金で厳しく取り立てたことは、インドの農村社会に大打撃となった。イギリスは当初インドの農村社会について何も知らなかったために、徴税権を貸したり、競売したりできる仕組みのヘースティングズ時代の土地制度は惨憺たる結果を招いた。しかも、1770 年の大飢饉が事態をさらに悪化させた。

平地で起きた反乱のリーダーはたいていザミンダールで、山岳地帯やジャングル地方では部族の族長だった。1800 年-01 年には、南インドで在地主領主層のポリガールが、大規模な反乱を起こした。1820 年代にはビール族が蜂起し、1855 年には西ベンガルのサンタール族が蜂起した。森に住んでいた彼らは、彼らの伝統的な生活を守るために蜂起したのである。自由主義思想の洗礼を受けたラームモーハンでさえ、ムスリム支配の数世紀はインド原住民の市民的・宗教的権利が常に蹂躙された時代であったと書いていた。

19 世紀の初めの 40 年間には、イギリスは東方のビルマ、北方のネパールへと領土を拡大し、その間はインド西部辺境地方には手をつけていなかった。パンジャーブ地方では、ランジト・スィングが苦境におちいったスィク教徒の部族民を招集し、スィク教徒ばかりでなくムスリムも受け入れ、訓練された約二万の歩兵部隊と 4,000 人の騎兵隊を擁する強大なスィク王国を築き上げていたからである。イギリスはインダス川流域一帯とさらにその遥か北方の領土の征服に乗り出した。イギリ

スは最初にインダス川流域を制圧しようとした。この地域が商業活動に重要であり、中央アジアへのハイウエイであると考えられたうえに、この地域を制圧すればアフガニスタンへ軍を進めることが容易だったからである。こうして、1839 年から 42 年にかけて、スィンド地方が頑固一徹の将軍チャールズ・ネーピアによって征服された。スィンド地方に続いてイギリスはアフガニスタンを攻撃し、第一次アフガン戦争（1839-42 年）が始まった。イギリスは、ヒンドゥークシ山脈へ向かって南下するロシアを抑えるために、険しい山の多いアフガニスタンを緩衝地帯にしようと考えた。

アフガニスタン征服をあきらめたイギリスは、次にパンジャーブのスィク王国に狙いを転じた。1845 年代一次スィク戦争（1845～46 年）に勝利を収め、ラーホールに外交官を駐在させた。イギリス側に味方して戦後の報奨を期待した人物の一人が、ヒンドゥー教徒でカシミール地方のジャンムーを支配していたグラブ・スィングだった。そして、ヒンドゥー教徒である彼に対して与えられた報奨は緑豊かな山岳地帯のカシミール王国だったが、そこに住む人々は、ほとんど全員がムスリムだった。これが契機となって、100 年後のこの地方でインドとパキスタンの間に深刻な紛争が生じることになる。

ダルハウジーの総督着任と同じ時期に始まった第二次スィク戦争（1848-49）によって、イギリスは肥沃で戦略的に重要なパンジャーブ地方を併合し、その結果、イギリスの支配領域はアフガニスタンに通じるカイバル峠まで広がった。ダルハウジーは 1852 年の第 2 次ビルマ戦争には気乗りしなかったが、下ビルマ地方を併合した。ダルハウジーはその形式的なムガル皇帝の地位さえも消滅させようとしたが、本国政府の反対で挫折した。1857 年の大反乱後の本国政府の方針は、軍事力の独占などによって集権的姿勢を強め、さまざまな封建的勢力を復活させて利用することだったからである。

ムスリム多住地域であるカシミールは当然パキスタンに帰属すべきであって、もしもカシミールがインドの普通の州なら、おそらく最初からパキスタンに統合されていただろう。したがって、ヒンドゥー教徒であるカシミール藩王の行為は、臣下のムスリムの利益を意図的に侵害するものであり、決して許されるべきではないとパキスタン側は主張した。そして、この誤りを正すためにパキスタンは過去 25 年間に 3 回インドと戦った。1948 年の第一次カシミール戦争では、パキスタンはギルギットとバルチスタンの北部とともにカシミール西部の一部を確保した。しかし、カシミール州の中心部のシュリーナガル周辺の肥沃な渓谷地帯は、一度も確保することができなかった。

2.3　多様な民族

民族植物学を統合の学問として構築する意思をもつのなら、民族とは何かを学び、明確にしないと、植物と民族は関係づけられない。植物の存在のあり方を求めて、多大なフィールド調査や実験研究を行いつつも、異分野の成果を学習せねばならない。短い人生ながら、何とか努力を重ねたい。

インドにおける民族の分布とその構造は大変に複雑で、これはまた過去のカーストの形成とも関連している。カーストについてはインドの社会を歴史的に考えるに当たってさけられない事柄であると思われるが、1950 年に発布された憲法ではカーストに基づく差別を禁止している。大変困難な問題であるので、カーストの側面には深くふれずに、むしろ民族の側面を取り上げることにしたい。何故ならば、歴史を見ると、カーストはイギリスによる植民地支配の道具として、使われたようなので、民族の歴史のほうが、雑穀の起源と伝播に関して、有効な根拠が得られると考えるからである。

2.3.1　民族のモザイク

リスレイ（Risley 1908）は「過去を再構成する最良の方法論は現在を観察することである」との信念に基づき、今となれば古典的な人類学書『インドの人々』(The People of India)において、カーストの形成について、身体の形態、婚姻制度、宗教、言語、民族性など観察から、詳細に論じている。カーストは単にブラーミン（司祭)、クシャトリア（王族)、バイシャ（平民）およびシュードラ（奴隷）の４階層に類別されるわけではなく、受け継いできた職業や民族（部族）が複雑に関わり、あるいはこれらの婚姻の結果生まれた子どもも区別されて、3000 を越えるカーストが存在したといわれる。この著作の中で、カーストあるいは宗教と食のシステムは重要であると述べているが、実質的な論議はされていない。

インド亜大陸に現在、居住分布する主要な民族グループは表 2.1 に示すように、９群に分類される。北方から南西アジア・ダルト系、ラマ仏教系、東南アジア系、北西インド系、東部インド系、西部インド系、半島部部族系、南部インド系、および海洋ムスリム系であり、これらは著しくモザイク様の分布を示している。

綾部（2008）は、「民族」という言葉を次のように定義している。古来の人間の集団的移動、征服・被征服、移民、難民、強制移住、奴隷制などによって生じる先住者との混淆、植民地主義、中央政府による課税対象としての分類など諸種の要因の上に、生業形態、言語、自然生態、儀礼、権力形態などの相違が加味されて類別された集団をさすものとして用いられてきた。したがって、時には御都合主義的に、時には政策上の必要から、共通の分類基準がないままに、18 世紀以降の国民国家形態の確立に対応して次第に定着してきた、あるいは慣例化してきた、「文化とアイデンティティ（帰属意識）を共通にすると考えられる人間集団」についての分類用語であるといえよう。

さらに、先住少数民族については次のように解説している。21 世紀、科学技術の発展は人類古来からの夢の多くを実現させていくかに見えた。しかし他方で、地球の自然、人間の環境は恐るべき勢いで荒廃してきている。人類による自然の秩序破壊と無関係ではないと思われる。こうした人類文化の変化・発展と地球環境の荒廃の中で、そのマイナス面のしわ寄せを最も苛酷に被っているのが一般的に当該国民国家の中で少数民族と呼ばれている人々で、なかでも先住少数民族と呼ばれる多くの孤立的集団であろう。綾部の論考を次に要約しておく。

1993 年国際先住民年に、世界銀行は 1993 年時における先住民の人口を 2 億から 2 億 5000 万人と推定している。文化と帰属意識を共通にする共同体としての民族はその区分が極めて難しく、境界領域が明瞭でない場合が多い。民族を分類する上で最も重要な基準のひとつが言語であるが、言語学者の間においても、現今の言語の数は 6,000 種から 7,000 種と考えられており定説というものはない。問題はこれら数千の言語のうちの 90～95％が 21 世紀中に消滅するか、消滅に向かい始めているということである。

少数民族という言葉が初めて用いられたのは、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのヨーロッパにおいてであり、フランス革命後の国民国家の出現とナショナリズムの昂揚の所産として現れている。近代ヨーロッパの政治的境界の変化の結果、国家権力を握った強大な民族へ従属する地位に追いやられた少数民族集団をさすのに用いたのである。これを分類すると次のようになる。

a 自律的少数民族：数は少なくとも、経済的、政治的に優越的ヘゲモニー集団に属していない人びとであり、宗教的、言語的あるいは文化的なアイデンティティを保持しており、そうした特色を自他ともに認められている人びとである。

ｂカースト的少数民族：自律的少数民族の対極にあり、一般に優越民族はカースト的少数民族をあらゆる点で先天的に劣位にあると考える。

ｃ移民的少数民族：ａとｂの中間にある。その多くがホスト社会へ多少とも自己の意志で移住してきた人々である。

ｄ難民的少数民族：戦争・紛争などによって、故地から逃れ長期的にわたって異国に暮らす難民。

ｅ先住少数民族：その土地の先住者でありながら、後発の有力な民族に圧倒され、多くの場合辺境に追いやられながら、なお強く文化的アイデンティティを保持している人びとである、

たとえば、東南アジア大陸部の山地民は伝統的に焼畑耕作民が多く、中国の雲南地域をも含めて、数百年にわたり、山岳地帯で焼畑移動耕作を生業としてきた人びとである。平地の水稲稲作民が次第に山岳部へ入って来るはるか以前からの山地居住民であったことは疑いないのである。先住少数民族の場合、民族自決権が留保されていると考えることができる。IT 革命、グローバル化が加速度的に進む現在、貴重な文化を育ててきたこれらの人びとの苦難を救っていくことこそ人類の最も御緊急な責務ではなかろうか。また、欧米諸国を中心に移民の増加が著しく、その結果、マイノリティに対する様々な差別が生まれていることに警鐘を鳴らした。複数の民族の共生、多様性を受け入れ多文化主義を育てる政策を各国政府に促す必要がある。

インドでは先住民を含む少数民族は一般にアーディヴァーシーadivasi（原住民）と呼ばれるが、植民地時代の公文書では部族 tribe、部族民 traibal　peoples という名称が使われ、独立後の憲法では指定部族 scheduled　tribes という行政用語で呼ばれている。国勢調査（2001）によると、部族民人口は約 8400 万人で、総人口の 8.2％である。ビール Bhil やゴンド Gond のように約 1200 万人を越えるものもあれば、数十人しかおらず絶滅の危機にさらされているものもある。

北東部、西部・中部・東部を結ぶ地帯は部族民集住地帯である。彼らは特定の人種に属しておらず、言語もインド・アーリヤ語系、ドラヴィダ語系、チベット・ビルマ語系、オーストロアジア語系、アンダマン語系と多様である。インドの部族は行政によって、独自の文化をもつ孤立した後進集団と規定されているが、人類学的定義は簡単ではなく、その背景は 3 点ある。

第一、部族民が必ずしも現在の居住地の先住民ではない。630 余りの部族集団（サブグループ含む）を調査してまとめた The Scheduled Tribes ｛Siingh 2003｝によれば、約 64.3％が現在の居所に移住してきたとされている。このため、アーディヴァーシーと言いながら、一概に先住民と定義することができない。

第二、地理的・社会的に孤立していない。ヒンドゥーやキリスト教文化などへの同化が著しく、一概に伝統文化を維持しているともいえない。

第三、部族とカーストとの違いが明確でない。

カーストは世襲的分業形態、浄・不浄の価値体系、階層間のヒエラルキーなどで特徴づけられる集団。出自にもとづいた部族集団は親族間の紐帯や平等主義が重視されるとみなされている。部族集団がカースト社会の底辺に組み込まれていく。部族とカーストの区分は植民地時代の国勢調査に初めて登場し、独立後も引き継がれている。部族の宗教とされたアニミズムと、大衆ヒンドゥー教を明確に区別することは難しく、アニミズム信仰をもつか否かでカースト集団と部族集団を分けることはできない。

インド部族民の半数にあたる約 4000 万人が森の中またはその周辺に住んでいる。彼らは長年森とともに生きており、食料を含むさまざまな生活の糧を森から得ている。生活のために食料、燃料用の薪、建材、家畜の飼料などを森から得ることや、四〇種余りの森の副産物（草、果物、葉、樹皮、根、土など）を売って現金収入を得ることが認められている。

表 2.1. インドの主な指定部族 1991

州・連邦直轄領(指定部族人口)	主な指定部族(人口)
東北部	
アルナーチャル・プラデーシュ(550,351)	ニシ(63,055)、アディ・ガロン(55,268)、ワンチョ(45,182)
アッサム(2,874,441)	ボロ(1,242,421)、ミリー(467,780)、ミキール(285,811)、ナガ(15,354)
メガラヤ(1,517,927)	カーシー(870,322)、ガロ(546,734)、ハジョン(29,997)
ナガランド(1,060,822)	アオ(165,893)、セマ(150,780)、コニャク(136,458)、アンガミ(97,408)、ナガ(11,962)
マニプル(632,173)	タドウ(121,994)、タンクル(107,244)、マオ(76,972)、カチャナガ(33,640)
ミゾラム(653,565)	ミゾ(500,146)、チャクマ(54,217)、クキ(31,077)
トリプラ(853,345)	トリプリ(461,531)、リャン(111,606)、チャクマ(96,096)
東部	
シッキム(90,901)	ボーテイア(59,449)、レプチャ(30,266)
西ベンガル(3,808,760)	サンタル(1,997,222)、オラーオン(536,919)、ブーミジ(291,808)、レプチャ(27,888)
ビハール(573,471)	サンタル(282,453)、オラーオン(77,052)、カルワル(69,250)
ジャールカンド(6,060,822)	サンタル(2,067,039)、オラーオン(1,137,656)、ムンダ(899,162)
オリッサ(7,032,214)	コンド(1,140,374)、ゴンド(701,139)、サンタル(404,864)
ウッタル・プラデーシュ(76,045)	タルー(66,395)、ボーテイア(5,106)、ボクサ(1,731)
ウッタラーンチャル(211,865)	ジャウンサリ(72,536)、タルー(70,534)、ボーテイア(33,478)
ヒマーチャル・プラデーシュ(218,349)	ガッディ(86,511)、カナウラ(45,154)、グッジャル(33,028)
ジャンムー＆カシミール	調査なし
パンジャーブ	指定部族なし
ハリヤーナー	指定部族なし
デリー	指定部族なし
チャンディーガル	指定部族なし
西部	
ラージャスタン(5,474,881)	ミナ(2,799,167)、ビール(2,305,982)、ガラシア(148,197)、サハリア(59,810)
グジャラート(6,161,775)	ビール(2,638,488)、ドゥーブラー(546,567)、ドーディアー(518,671)
ダーダラー＆ナガルハヴエーリー(109,380)	ワールリー(69,756)、ドーディアー(17,518)、コクナ(17,415)、ドゥーブラー(2,352)
ダマン＆ディウ(11,724)	ドゥーブラー(8,963)、ドーディアー(1,505)、ワールリー(812)
ゴア(376)	ナイクダ(159)、ドーディアー(44)、ドゥーブラー(21)
中部	
マハーラシュトラ(7,318,281)	ゴンド(1,442,986)、ビール(1,344,554)、コリ・マハーデーヴ(999,321)、ドゥーブラー(21,168)
マディヤ・プラーデーシュ(9,681,910)	ゴンド(3,575,601)、ビール(3,428,100)、コール(764,414)、サハリア(331,574)
チャッティースガル(5,717,124)	ゴンド(3,152,237)、カワール(647,659)、オラーオン(530,406)
南部	
アーンドラ・プラデーシュ(4,199,481)	スガーリ(1,641,897)、コヤ(456,496)、イェナディ(395,739)
カルナータカ(1,915,691)	ナイクダ(1,370,455)、ゴンド(124,065)、マラーティー(75,708)
タミルナードゥ(574,194)	マラヤーリ(249,679)、イルラ(138,827)、カットゥナヤカン(42,761)、トダ(1,100)
ケーララ(320,967)	パニヤン(67,948)、クリッチャン(28,287)、マラーティー(26,042)
ラクシャドゥイープ(48,163)	
ポンディチェリー	指定部族なし
ベンガル湾島嶼部	
アンダマン＆ニコバル諸島(26,770)	ニコバリーズ(25,939)

金基淑(2008)概要に改変、出所:Mandal, H., Mukherjee, S., Datta, A. (eds.), INDIA, An Illustrated Atlas of Tribal World, 2002.

インドの部族民の経済状況は相変わらず厳しい。森林や牧草地の減少により移動耕作や遊牧を生計手段とする集団は大幅に減少しており、80%以上の人びとが農民や農業労働者として生計を営んでいる。ほかの仕事と兼業しないと生活が成り立たない。また借金による土地の手放しや部族民地域における開発の影響などで、土地なし層に転落してしまう人も増えてきている。1961 年から 1991 年までの 30 年間における部族民の耕作者と農業労働者人口の推移をみると、前者が 68.18%から 54.5%に減少しているのに対し、後者は 19.71%から 32.69%へと増加しており (Goswami2003:89)、土地の手放しが進んでいることがわかる。

東部のジャールカンド州やオリッサ州などの例にみるように、ダム・工場の建設や採鉱のために部族民の土地が当てられているが、補償が十分でない場合もあり、多くの部族民が確かな生計手段をもたず不安定な生活を強いられている。アンダマン＆ニコバル諸島にまで移り住む人も多く、独立以来、部族民集住地域の人口は減少し続けている。さらに部族民地域における開発や都市化は非

部族民の流入を招き、当該地域における民族間の葛藤や部族民人口の減少に拍車をかけているのである。

2.3.2　先住民族

主な南アジアの先住民族について金（2008）により、引用整理しておく。黒川（金基淑編 2008）は先住民の現状について次のように記している。

多民族が社会を構成するインドにおいて、どの民族が先住であるのかという問題については、さまざまな議論や主張があるが、「アディヴァシイ」（Adivasi　先住の人々の意、または指定部族 Scheduled Tribe）、そして「ダリット」（Dalit　踏みつけられた人々の意、または指定カースト Scheduled Caste）という出自・身分に関する行政区分に含められた人々が先住民族と考えられている。アディヴァシィに含められた民族の数は、全インドにおいてサブグループも含めると、現在約 635 の民族であるとされている。そしてその人口は、インドの総人口約 10 億人のうち、約 8.2%を占める約 8432 万人にのぼる。

近年ではアディヴァシィというサンスクリット語の用語が、それまで長いあいだ用いられてきた英語の tribe「部族」に替わって用いられることが一般的となっているが、言葉が変わっても二つの言葉が示す内容にほとんど変化はない。インドにおける「部族」（tribe）という概念は多分に、イギリス植民地時代にキリスト教宣教師の活動の中から生まれてきたものであり、主流をしめるヒンドゥー教徒とは区別する目的で、それとは異なる信仰をもっている人々をまとめて扱ったとされている。つまりヒンドゥー教徒とは異なるということで、歴史的背景も異なるさまざまな民族が、アディヴァシィという区分に一緒にされている。

アディヴァシィに区分されるさまざまな民族の分布は、インドの各地により大きく異なっている。インド洋の島ラクシャディープ Lakshadeep では人口の 94.5%がアディヴァシィ人口であり、ついで東北部のミゾラム、ナガランド、メガラヤにおけるアディヴァシィの人口は、州の全人口の 80 から 94%を占めている。つまり、こうした地域ではアディヴァシィの範疇に含められる民族が多数派であり、州の主要な人口を構成している。一方インドの北部にある主要な州のウッタル・プラデーシュ州や南部のケララ州においては、アディヴァシィの人口は州の人口全体の 1%にも満たない少数派である。とはいえアディヴァシィの人口が州の人口の 1%に満たないタミル・ナードゥ州でさえ、その数は 65 万人とされている。

一方、ダリットあるいは指定カーストという区分に入れられている人々は、何百年にもわたるカースト制のもとで、ヒンドゥー社会の階層秩序の枠外の存在とされ、最下層の不可触民として扱われてきた。それは昔、先住民族であった彼らが、後発のカースト・ヒンドゥー勢力の支配下に組み入れられたことによるものという主張がよくなされる。マハトマ・ガンディが用いたハリジャンに替わって、踏みつけられたものを意味するダリットという名称が一般的に用いられるようになったこれらの人々は、インド全土で約 1 億 6000 万人もの人口を数えるのであり、これは全人口約 10 億人のうちの約 16%を占める（2001）。

2.3.3　インド

１）ラージボンシ

西ベンガル州の指定カーストのなかで最も人口の多いラージボンシ（約 320 万人、2001 年）は農業を生業としているが、その多くが小作人や農業労働者で、経済的に貧しい。彼らの先祖は紀元前 10 世紀頃、東の方からインドの北東部に移住してきたモンゴル系の民族、ボド Bodo の一支族であるコチ Koch といわれている。しかし、今のラージボンシとコチの外見にはモンゴロイドの陰は薄

く、それを異なる民族間の通婚による結果とみる見解もある。元来はボドはチベット・ビルマ語系の言葉を話していたが、現在ラージボンシやコチのほとんどはベンガル語やアッサム語の方言を母語としている。

もと部族民であった人々がどのようにラージボンシという名を名乗るようになり、現在のラージボンシ・カーストになっていったのかを、20 世紀のカースト運動を中心に、部族集団のカースト・ヒンドゥー社会への編入の一例を見る。こうした「組み入れ」を「進化」としてではなく、部族集団のヒンドゥー社会への積極的同化とみなす。ラージボンシは 16 世紀に北ベンガルで勢力を伸ばし、440 年間この地を統治したコチビハル王国・藩王国の末裔といわれている。コチ、メチ、ラバ Rabha などボド系の民族間で通婚は珍しくなかった（金基淑、金編 2008）。

２）ナガ

ミャンマーと国境を接するインド東部のナガ丘陵にナガ Naga がいる。主にナガランド州に居住するが、マニプル、アッサム、アルナチャールプラデーシュからミャンマー東部ににも分布している。人口は 200 万人以上。ナガは単一民族ではなく、アオ Ao、アンガミ Angami、セマ Sema、タンクル Thangkhul、ロタ Lhota、コニャク Konyak、サンタム Sangtam など 40 ほどの少数民族の総称である。ナガに共通語はなく、多くはチベット・ビルマ諸語に属する。アニミズム、土着宗教、キリスト教（井上恭子、金編 2008）。

３）サンタル

サンタル Santal（自称はホル Hor、Horhopon）は 600 万人（2001）。オーストロアジア語系、主に西ベンガル、ビハール、ジャールカンド、オリッサ州に居住している。バングラに 60 万人、ネパールに 5 万人、ブータンに 1.6 万人いる。サンタル語（ジャールカンド州の公用語）はオーストロアジア語族のムンダ語派に属し、インドの諸言語のうち最も古いものの一つとされる。サンタルの多くは居住地域の多数派の言語を話せるマルチリンガルだが、今も母語を失わずにいるインド最大の部族民の一つである。

かつてサンタルは狩猟採集や漁撈を生業にしていたが、現在、農村部や丘陵地帯に住む多くは稲作中心の農業を営んでいる。稲作は基本的に天水を利用するが、灌漑設備が整っている平地では二期作が可能なところもある。また丘陵地帯の人々は雨期に焼畑を作って豆類や雑穀を栽培したりする。農作業において鋤入れや土手づくりは男性の仕事で、田植えと脱穀は女性の仕事とされるが、他の作業は男女共同で行う。サンタルは祭り好きで知られ、花祭り Baha puja や収穫祭 Sorae puja など農業と関係している祭りが多い。

サンタルの頻繁な移動は人口の増加に伴う耕作地の確保や、周辺民族との葛藤のためと思われている。もともと耕地の少ないジャングルや高原地帯に住んでいたサンタルは、人口が増えるにつれ新たな土地を求めて移動を繰り返したり、ヒンドゥーの地主に雇われてジャングルを耕地に変えるなどしてきた。こうして一九世紀の前半には、今のジャールカンド州北東部に位置するラージマハル山麓のダミン＝イ＝コーdamin-i-koh（山の麓の意）地域がサンタルの中心地となっていた。・・祖先ボンガには毎日米の供物が供えられ、また新酒ができたときや祭りの際に酒や特別な供物が捧げられる。

文化要素の借用の問題は明白な結論を出すのが難しく、また集団間の文化的類似点をすべて借用によるものと見なすべきでもない。同一地域（または村）に住む人々はカーストや宗教や民族などの違いに関係なくその地域特有の文化を共有している場合が多いからである。

同一カーストや部族民同士で集落を成して暮らす傾向の強いインドの村落においては、日常生活から人生儀礼にいたるまで、同じ集団の仲間同士の助け合いがなければ生活が成り立たないといってよい。二〇〇〇年一一月一五日、旧ビハール州が二分し、（新）ビハール州と、インド共和国の

二八番目の州としてジャールカンド州が誕生した。この地域は古くからサンタル、オラーオン Oraon、ムンダ Munda、ホーHor をはじめ多くの部族民の居住地として知られている。(金基淑、金編 2008)。

４）ビール Bhil

ビールはインド西部から中西部のラージャスターン州、グジャラート州、マハーラーシュトラ州、マディヤプラデーシュ州の境界部を中心にこのあたりの山地から平地に居住。ゴンドに次いで二番目に人口の多い部族民。1268 万人（2001）国勢調査。

部族民とはだれのことかという問題は非常に難しい。「ｘｘ人」というカテゴリーが政治経済的な利害に絡んで歴史的に構築されてきたからであり、このカテゴリーの境界がそのときの状況に応じて常に変動するという事情をはらんでいるからである。・・部族民のアイデンティティそのものを人為的に操作できるという観念が人びとに共有されている、という事実であろう。

ビールの言語はインド・アーリアン系、地域優占言語の影響を強く受けている。

（Unnithan1994）は、イギリス植民地統治期にラージプートとビールなどの「部族民」の差異が固定化したとし、①植民地統治によりインド社会が相対的に平和となった結果ラージプート諸王国の領土拡大が不可能となり、社会的流動性が失われた。そのためこの時期にラージプートの下層部に位置していた人々が貧窮化し、文化的にも劣位にあるものとして位置づけられるようになった、②植民地支配当局の森林政策によって山岳地帯での移動農耕が禁止されたため、山地に追い上げられるように暮らしていたラージプートの劣位民の貧窮化に拍車がかかった、③当局が実施した国勢調査によって、劣位民が「部族民」と分類され、当局の視点によって差異が固定化された、という三点をラージプートと連続的であった人びとが「部族民」となった要因としている。

バガット運動 Bhagat：ビールの間でこの運動がもっとも高揚したのは 20 世紀初頭、ちょうど植民地統治の影響によって山地民の「部族民」かが固定化したとされる時期であった。運動のリーダーはゴヴィンドギリ Govindgiri というバンジャラ Banjara（遊牧や交易に従事する半定住民）出身の宗教家で、ラーマへの絶対的帰依と生活習慣の改良を訴え、ラージャスターン南部からグジャラートのビールの間に多くの信者を獲得した。当時この地域は大規模な飢饉に見舞われており、ゴヴィンドギリはビールの救世主のように崇拝されていたとも言う。

バガット運動は通常は宗教運動と見なされ、部族民のサンスクリット化、すなわちヒンドゥーとりわけカーストのヒエラルキーの最上位を占めるバラモンの宗教文化や生活習慣を取り入れ模倣することによって、カースト社会における地位を向上させることをねらいとした運動、の一種とみなされた（三尾稔、金編 2008)。

6）サハリア Saharia

サハリアはマディヤプラデーシュ州に主に分布する。人口 45 万人（2001)。居住の核心地域は狭い範囲に限定される。北部がチャンバル川流域の沖積低地、南部がマルワ高原にあたる。主に黒土や砂質の上織り交ぜた石の多い土であり、耕土の土壌条件はあまりよくない。政府の「保存林」「保護林」となっていることが多い。気候は夏暑く、冬寒く、しかも雨量は少ない。降雨量の少なさ、土壌条件、森林破壊があいまって、干ばつに襲われることも多い。

サハリアは本来森の民であり、外の世界との接触が少なかったとされるが、コル Kol かムンダ Munda に属すると考えられている。彼らの現状は森林から遊離しており、石切労働者や農業労働者などの日雇い労働者化が進んでいる。ヒンディー語、アニミストからヒンドゥー教に変化。部族としての独自性を失いつつある。農地は持たないか、面積は少ない。テンドゥー樹（タバコ）の葉や薪を収集、林産物を販売して生計。現在の主な作物はトウモロコシとヒヨコマメが中心で、いずれも自給的。休閑地が多く、耕作放棄が進んでいる（岡橋秀典、金編 2008)。

７）ドゥーブラーDubla

グジャラートおよびその周辺に居住。隷属的農業労働者。ドゥーブラーは「弱い、貧しい」の意のグジャラティー語。人口は 55 万人。多くはヒンドゥー教。食初めの日には赤子に小麦粥 sira を食べさせる（篠田隆、金編 2008）。

8）アーディ・ドラヴィダ AdiDravida

「原ドラヴィダ」「先住ドラビダ」の意。タミールナードゥの不可触民。この名称は近代の産物、カースト。人口 640 万人。南インドに居住域を広げている。日雇い農業労働者、森林労働者、簡易タクシーの運転手などが多い。タミル語ほか、地域言語。（杉本良男、金編 2008）

９）トダ Toda

タミールナードゥのニールギリ高地（青い山脈の意）に居住。南部ドラヴィダ語系のトダ語。人口は 1700 人ほど。基本的には米食であったが、次第に雑穀を摂るようになっている。多くは菜食であるが、キリスト教への改宗者には非菜食者もある。

ニールギリ高地は最高峰が 2,600m生態系保護区に指定。ここにはほかにバダカ Badaga15 万人、クルンバ Kurumba 7,700 人、コータ Kota 1,000 人、イルーラ Irular 19 万人。トダの生業は、伝統的には水牛の牧畜。農業を兼業するようになった。トダの神々は集合的に「山の神 teutit」とよばれる。神がみがニールギリの山に宿っていると考えられている（杉本良男、金編 2008）。

2.3.4　バングラデシュ

10）チャクマ Chakma

チャクマ（自称 Tsakma、Sakma、Sangma）はチッタゴン丘陵地域の人口の半数を占めた。丘陵民 Hill People。ランガマティ県に集中する。チッタゴン丘陵地域には、他に、ブム Bum（ボム Bom）、チャク Chak、キャン Khyang、クミ Khumi、ルシャイ Lushai（ミゾ Mizo）、マルマ Marma、ムラン Murang（ムルン Murung）、ムル Mru、パンコー Pangkho（パンクー Phankhu）、ラカイン Rakhain、シャオタール Saotal（サンタル Santal）、トンチョンギャ Tanchaynga、ティペラ Tippera（トリプリ Tripuri）、らの民族集団が共住する。ベンガル語チッタゴン方言の影響を受けたチャクマ語、インド・ヨーロッパ語系だが、ベンガル語とビルマ語の混淆が起源。生業は農業が中心。本来は焼畑。半定住で移動していたが、定住化が進む。旧植民地時代に、焼畑に代わって稲作や畑作に果樹やゴム栽培を加えた混合農業を推奨された。1963 年にカプタイ・ダムができて、全耕地の 40%が家屋敷地ともども水没した。最上質の耕地であったが、代替地は 1／3 になり、未耕地の傾斜地であった。焼畑も禁止されて、生活は困窮した。

バングラデシュの多数民族はベンガル人、9 割以上がムスリム、1 割弱がヒンドゥー、若干のキリスト教、チャクマほかの丘陵民は他地方からの移入民である。北西部にドラヴィダ語系諸族（オラーオンなど）とムンダ語系諸族（サンタルなど）、中北部にボド・ナガ語系（おもにガロ）、北東部にクキ・チン語系（モニプリなど）とモン・クメール語系（カーシアなど）、それに南東部となる。ベンガル人は平地に展開し、水稲稲作中心の農業を主たる生業としてきた。少数民族は丘陵地や海岸地帯の非平地で、焼畑や森林利用、漁業や交易をしてきた。（高田峰夫、金編 2008）

2.3.5　スリランカ

11）ウエッダーVedda

仏教徒のシンハラ Shinhala（73%）、ヒンドゥー教徒のタミル Tamil（18%）,イスラーム教徒のマラッカラ Marakkala（7%）、他。ウエッダーは東部密林地帯に住む狩猟採集民、南インドのコタ、トダ、バダカなどと共通する。人口は 400（1963）。ウエッダーは、森に住み、洞窟や岩陰を住居と

し、弓矢を用いて鹿や豚などの野生動物を捕獲し、ヤムイモや蜂蜜などを採ってクラス狩猟採集民（森のウエッダー)、村に定住して家畜飼育を行い、チェーナ chena と呼ばれる焼畑を営みシコクビエ kurakkan や野菜を栽培する農耕民（村のウエッダー)、海岸部に住んでタミルと混血し農業や漁業を営む者（海岸のウエッダー）とした（Seligman1911)。ウエッダーはシンハラ社会の対極として「創られた」民族の可能性もある。現在では水稲耕作を導入し、仏教儀礼を行い、カースト体系へ編入され、シンハラ化が進んでいる。

ウエッダーは、シンハラとの関係性の中で「周縁」に位置付けられる文化的社会的範疇となり、さまざまな表象と言説を生成して、時代と共に変化してきた。文化的には野生・後進・危険、社会的には狩猟・焼畑・母系などである。時代を下るにつれて、狩猟採集、焼畑農耕、漁業という非水稲耕作民への偏見が増幅し、最後に進化主義の影響を残した人類学者が古層の人々と認定して位置づけが確定した。民族誌的権威の大いなる働きである。狩猟は人口希薄地帯の生活で、焼畑は水田と異なり多くの人口を維持できないという生業への偏見も加わった。人種や民族という近代概念が登場するまでは、相互に緩やかな差異の中に生きていた人々の間に、明確な断絶を持ち込んだのは人類学者ともいえる（鈴木正崇、金編 2008)。

2.3.6　パキスタン

中央政府によって国語と定義されたウルドゥー語をめぐっての言語運動がある。各民族にとっては、ウルドゥー語とウルドゥー語話者は外から入ってきた侵入者である。他の言語、スィーンディー、パシュトゥーン、サラエスキー、北部山岳地域、カシュミーリー、バルティ、ブルーシャスキー、カーフィリー、ワヒーなどの少数言語。太古よりインダス川を境に東部はインド系の､西部にはイラン系の言語を話す諸民族が興亡してきたといえるパキスタンにおいて、南部の海岸周辺では､インド顔の人とは明らかに異なる風貌を持つ人種を見かけることがある。彼らは､主に東アフリカ海岸やアビシニア（エチオピア）からもたらされた黒人奴隷の子孫で、スィーンディーSidi やハブシーHabshi と呼ばれている（村山、金編 2008)。

12）ブラーフィーBrahui　　ドラヴィダ語話者

ブラーフィーはブラーフィー語を母語とする部族集団で、バローチー語を母語とするバローチーとともにバローチー民族を構成する。彼らはバローチスターン州カラート管区の山岳地帯を中心に、スィンド州西部、アフガニスタン南東部、イラン東部、トルクメニスタンに分布する。人口 260 万人のうち、230 万人がパキスタンに居住する。ブラーフィー語はドラヴィダ語族北部支脈に位置付けられている。ドラヴィダ語族が西方からインド亜大陸へ移動してきた経路を想定する上で、「最西端のドラヴィダ語」として重要な位置を占めている。イスラム教スンナ派。ブラーフィーの食生活は、現在は 3 食、伝統的には 2 食制であった。基本的には麦食で、小麦の全粒粉で焼かれるイラグ iragh と呼ばれるパンを食べる。家庭で焼く場合は、直径 30 センチにもなる円形の薄パンとなる。移動中の遊牧民たちは同型だが 3 センチ程度の熱さがある日持ちするパンを焼く。おかずは、野菜や肉を塩とトマトで煮込んだものが多く、スパイスは使用するが辛い物は多くない。ホルード xorud という乾燥させたチーズを使った料理は日常のごちそう、そして羊を野外の炭火で六時間以上焼いたサッジ―sajji はお客用のごちそう。茶 cha は紅茶に砂糖を入れたもので、ミルクは常用しない。ブラーフィーの生業は遊牧、半農半牧のノマドを別にすれば、農業、運送業、サービス業などである。極端に商業を嫌う。利潤を動機と目的とした商業活動は恥。(村田和之、金編 2008)。

13）ヌールバフシー派 Nurbakhshi

バルティスターンの宗教マイノリティ。バルティスターンはインダス川上流部に位置し、スカルドゥとガーンチェの二県で構成。チベット文化の影響が強い。バルティ語はチベット語の方言であ

る。河谷の平地に居住。主たる生業は、氷河の雪解け水を利用する灌漑農業と、いわゆる移牧の形態をとる牧畜である。作物は、大麦、小麦、ソバ、トウモロコシ、ジャガイモである。粟や黍といった雑穀も栽培されている。耕作限界を超える高地、荒れ地、傾斜地を季節的に利用する移牧では、ヤギ、羊、牛、ヤク、ゾー（ヤクと牛の雑種）を飼養し、乳製品と肉を得ている。また、アンズ、リンゴ、ナシ、サクランボ、アーモンド、クルミが栽培されている。山地農民。農作物の商品化、ジャガイモ（種芋）を換金作物に、ドライフルーツ、この収入で小麦を購入する（子島進、金編 2008）。

14）カラーシャ Kalasha

チトラル南西部（カーフィリスターン）に住む半農半牧の民。ほぼ自給自足の生活。「カラーシャのしきたり」という多神教を信仰。インド・アーリア語に属するカラーシャ語で文字はない。アレキサンダー東征軍の末裔。

ヒンドゥークシュ山脈に囲まれたチトラルはコワール語を持つ藩王国として存続してきた。中央アジアが間近に迫っている。・・カラーシャの村が現れる標高 2000 メートル付近になると、山肌にはカシの林が広がり、尾根につづく上部はスギ林におおわれるようになる。村の周囲にはクルミやアンズ、リンゴなどの果樹が大きく枝をはりめぐらし、畑ではすくすくと伸びたトウモロコシの穂先がエメラルド色に輝く。

カラーシャが栽培している穀物は、トウモロコシとコムギ、キビである。粉にひいてパンを焼き、主食として食べる。初年度は春にトウモロコシを播き、秋の収穫後にコムギを植えて冬を越させ、次年度の初夏にコムギを収穫したのち、キビを育てて秋に収穫し、冬の間は休耕する。こうしてひとつの畑を二年がかりで輪作するわけだが、どの家族も複数の畑を所有して輪作サイクルを一年ずらしているため、毎年三種類の作物を収穫できる。最近では味覚的にキビが好まれなくなったこともあり、単位面積あたりの収量が何倍にも増える、早生種のトウモロコシを植える畑が多くなってきた。トマトやジャガイモ、カボチャ、タマネギなどの野菜を家の周囲の小さな畑で育てている。これらの野菜が入ってきたのは五〇～六〇年ほど前からで、それ以前は副食といえば、各種の豆を煮たものや乳製品しかなかったという。老人のなかには、未だに野菜を好まない者もいる。豆類はトウモロコシの茎に巻きつかせて育て、冬のあいだの重要な栄養源とする。また、クワの実やアンズ、リンゴ、ナシ、モモ、ブドウなどの果物をよく食べる。農耕と並んで牧畜もカラーシャの重要な生業である。主力となる家畜はヤギで、乳をしぼり、各種のチーズやバターをつくる（丸山純、金編 2008）。

2.4　多様な宗教

宗教はヒンドゥーｳ教、イスラム教はじめ、キリスト教、仏教、シーク教、ジャイナ教などのほか、地域的な宗教も夥しい人々の信仰を集めている。言語は大まかに見ると南部はトラビダ諸言語、北西部はインド・アーリア諸言語、東部はシナ・チベット諸言語を用いており、さらに中・東部にはオーストロアジア諸言語を用いる民族が点在して居住している。これらの宗教や言語を含めて、複雑に文化要素を組合せた民族集団が、北方から南西アジア・ダルド系、ラマ仏教系、東南アジア系、北西インド系、東部インド系、西部インド系、半島部部族系、南部インド系、およびムスリム系集団というように、モザイク様の分布を呈している（Johnson, 1983）。

インド亜大陸は宗教などの精神文化要素においても著しく多様である。宗教はヒンドゥーｳ教、イスラム教はじめ、キリスト教、仏教、シーク教、ジャイナ教などのほか、地域的な宗教も夥しい人々の信仰を集めている。また、現代でもタゴールやクリシュナムルティ

などの優れた思想家を輩出している。

2.4.1　宗教の概略

世界宗教大事典（山折監修 1991）により、インド亜大陸において信仰されている宗教について、整理をしておく。

宗教の伝播は言語と同じく、雑穀の伝播に関わると考えられる。インド亜大陸の宗教はあまりに多様であり、実に長い歴史を有するが、詳細は専門的な著作に求めるとして、世界宗教大事典（山折監修 1991）に基づき、その概要を創始年代順に伝播に配慮しながら次に記す。私の信仰論は別稿において深めることにした。

１）アニミズムは、万物に宿り、宿ったものから独立して存在しうる霊魂や精霊に関する観念・信念を意味している。霊魂は人間のみでなく、動植物、自然物、自然現象にも宿るとしている。アニミズムは原始未開社会や原始宗教の特質であり、現代社会や文明宗教においてはその意義と役割を著しく失うと考えられてきた。しかし現代の諸宗教においても、その基層部分にはアニミズムが濃厚に見られる。

２）拝火教はゾロアスターがイラン北東部で創唱した（前 2000 年紀から前 7～前 6 世紀で、不明確）。火を神化して崇拝する信仰の総称で、聖典はアベスター。10 世紀以降、教徒がインド、パキスタンへ移住した。

３）ユダヤ教は前 2000 年紀初頭に、神に選ばれたヘブライ人アブラハム（遊牧民）が彼の子孫にカナン（パレスティナ）の地を与えるという神の約束を受けて移住してきた。エルサレム（シオン）をもっとも重要な聖地とする信仰。ユダヤ教の教義は民族史のなかで生起した事件と関連して形成されてきた。ラビの時代のユダヤ教を経て、ユダヤ人の世界の情勢を受けて世界各地を流転した。前 4 世紀末アレキサンドロス大王の東征によるヘレニズム化はユダヤ教を禁じ、5 世紀初頭にはキリスト教を国教とするローマ帝国に弾圧された。ペルシャ時代以降、ユダヤ人は世界各地に離散民として移住した。19 世紀後半には帝政ロシアの迫害により、多くのユダヤ人がアメリカに逃げた。第 2 次世界大戦後、シオニズムに基づく新生ユダヤ国家イスラエルが独立した。

４）仏教は仏陀の説いた教え。前 5 世紀頃インドのガンジス川中流地方に興った。仏陀釈迦牟尼の説法に基づき、人間の煩悩の解決の道を教える。仏滅百年頃から部派に分裂し、部派仏教の時代に入ったが、1 世紀頃それに批判的な大乗仏教が興った。東南アジアのパーリ語仏典による上座部仏教は前 3 世紀に伝道されたスリランカを中心に、タイでも信仰されている。東アジアの漢訳仏典による大乗仏教はインド北西部から中央アジアを経て広まり、中国、朝鮮、日本において信仰されてきた。チベット語仏典による大乗仏教はネパールやチベットにおいて信仰されている。インドの仏教は 13 世紀初頭にトルコ系イスラム教徒の弾圧で、教団が破壊され滅びた。現代に入って新仏教徒と呼ばれる宗教社会運動がアンベードカルらによって起こり、仏教の復興が進んでいる。欧米にも日本の禅、スリランカの大菩提会、チベット移民による宗教活動があり、教徒や思想的共鳴者がいる。

５）ジャイナ教は、インドで前 6 世紀頃にヴァルダマーナの起こした宗教。仏教と同じく、ヴェーダの教義を否定し、一種の無神論であるが、倫理的色彩が濃く、とくに苦行、禁欲、不殺生アヒンサーを重んじる。一世紀頃、白衣派と裸行派の二つに分裂。聖典はシッダーンタまたはアーガマと呼ばれる。インド以外にはほとんど広がらなかったが、2500 年にわたってインド文化に影響を与えてきた。白衣派はグジャラート、ラージャスターンおよびムンバイに多く、裸行派はほとんど南インドに集中する。カルナータカ州には例外

的に農民もいるが、ほとんどは商業関係の職業をもつ。

６）ヒンドゥー教はインド国民の大多数が信奉している、渾然とした宗教・文化の複合体に対する便宜的な呼称で、明快な定義はむずかしい。呪物崇拝・アニミズム・祖先崇拝・偶像崇拝・汎神論哲学などの諸要素を含み、多くの宗派に分かれる。ヴェーダ経典の基づくバラモン教を前身（前 1200~500 年）とし、各地の土着信仰をとり入れ、ヒンドゥー教は 4 世紀頃に確立した。その後、大乗仏教の影響をも加え、5 世紀から 10 世紀にかけて発展した。その後、イスラム教・キリスト教が入るに及んで一時衰退、19 世紀にヒンドゥー復古主義による宗教改革運動があって再び隆盛に向かった。ヒンドゥー教はインド中心とはいえ、商人や移民によってスリランカ、インドネシア、ネパールなどに伝播し、今日も信徒がいる。

７）キリスト教は、イエスをキリストと認め、その人格と教えを中心する宗教で、旧約・新約聖書が経典である。正義と慈愛とに満ちた父なる神、人類の罪、キリストによる贖罪を説く。キリスト教はパレスティナに起こり、イエスは前 7 年から前 4 年の間に生まれ、30 年ほど活動した。キリスト教は地中海世界に広がり、ローマ帝国の国教となった。7 世紀前半に中央アジアから中国に伝播、13~14 世紀にインドに伝道、16 世紀にはアジア伝道が本格化し、1542 年にイエズス会のザビエルがインド西岸のゴアに来訪し、その後、フィリピン、日本（1549 年）にまで至った。17 世紀にはアメリカに伝わり、現在は欧米のほかほとんど世界のいたる所に信徒を有する。

８）イスラム教は 610～632 年頃、ムハンマドが創始、ユダヤ教、キリスト教と同系の一神教で、唯一神アッラーと予言者ムハンマドを認めることを根本教義とする。聖典はコーラン。その教えは、シャリーアとして体系化され、教徒の日常生活や人間関係のあり方、種々の社会制度から国家の統治までを規定。ムスリム（信者）は 8 世紀には中央アジア、北西インド、北アフリカ、イベリア半島を征服した。13 世紀末から 15 世紀にかけて、東南アジア、インドネシアやフィリピンにも拡大した。法学・神学上の違いから、スンニー派とシーア派に大別される。中世には、オリエント文明やヘレニズム文化を吸収した、独自の文明が成立、哲学、医学、天文学、地理学などが発達し、近代ヨーロッパ文化の誕生にも寄与した。三大聖地はメッカ、メディナ。エルサレム。

2.4.2　多様な宗教の現状

インドは 80%以上がヒンドゥー教徒で、パキスタンとバングラデシュは大半がイスラム教徒である。インド国内でもイスラム教徒が多いのは両国の近隣地域であるが、スンニー派が多く、シーア派は各地に点在している。軍隊組織のスィク教徒はヒンドゥースタン平原で最も肥沃な地域であるパンジャブ州に多い。キリスト教徒はケララ州や東インド諸州に多い。このほか、1%未満とはいえ、人口的に多いのは仏教徒やジャイナ教とである。ネパールとブータンは仏教（ラマ教）、スリランカも仏教徒が多い。ゾロアスター教も信者がいる。モルジブはイスラム教（スンニー派）である。先住民にはアニミズムを信仰している人々もおり、ヒンドゥー教は特別の経典をもたず、地域の神々を大らかに取り入れた多神教であり、アニミズム的な要素を多分にもっている。巨木やヘビを信仰し、聖なる森を維持するなどはその現れであろう。

佐藤（1998）によれば、少数のジャイナ教徒、拝火教徒などの諸派、および数の上でこれにまさる土俗信仰者アニミストを除くと、現在、インドの住民は、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒の二大群に分かれている。イスラム教徒は、おおむね中央アジアに発祥した種

族であったが、その公用語にはペルシャ語を使用していた。その後、彼らはペルシャ語にヒンドゥー語を融合させたウルドゥ語と呼ばれる混合言語を発達させて使用するようになった。種姓制度は、アーリア人がパンジャーブから東方に向かって進出をつづけ、その社会生活が複雑化する過程に生育したものである。『リグ・ヴェーダ』の故郷である西北インドの住民は、厳密な種姓制度を守らなかったため、当時すでにバラモン文化が独自の発達をしていたガンジス、ジュムナー両河流域の住民によって、半野蛮人とみなされたのである。マヌの法典によると、現家長は祖先を祭るとき、曾祖父までの上三世代に米飯でつくった団子（祭菓ピング）をそなえ、故人となれば、曽孫までの下三世代から祭菓をそなえられる。神々は人間と同じく牛乳、バター、粉餅を食べ、爽快なソーマ酒を痛飲した。これらの物質は供儀によって神々のもとに届けられるものである。その報酬として神々は崇拝者に、必要なときの降雨や家禽、家畜などの福祉をあたえ、飢饉や疾病の悪鬼から人びとを守るのであった。

南インドとオリッサの古いヒンドゥーの寺院には舞踏と食物配給のための別館がある。祭事に神々に踊りと神饌を奉納し、その後に共に楽しみ、頂いたのであろう。調査の合間に、信仰心の篤いインドの同僚たちに従って、どれほどの社寺を巡ったことか。私はアニミストで仏教徒ではない。しかし、日本人は仏教徒と思われ、仏陀はヒンドゥーのビシュヌ神の化身であるとされている。したがって、仏教徒はヒンドゥー教徒の範疇と大らかに解釈され、寺院内陣まで導かれて、お清めを受けることができるのである。調査の途上、宗教論議はたびたびあり、自らの信仰を明らかにする必要があった。出会いの始めは勝手な解釈で仏教徒とされていたし、教養として宗教には関心があったので、主な経典は一応読んではいたが、信仰について深く考えることは思春期以降途絶えていた。しかし、生きるうえでの信仰のない人は信用しないということをインドと日本の研究者たちが意味していると気づかされることになった。親しい人に信仰を明らかにできないのは、交際を続ける上で不誠実だということである。そこで、自然に対して強い敬意を抱いているので、信仰はアニミストということにした。これはインドの同僚たちに受け入れられた。後に述べるマディア･プラデシュ州のアワを栽培している先住民を訪問した時（1996 年 12 月前半）には、彼らはあなたと同じアニミストで、太陽を信仰している人たちだと紹介された。

私は、当時の野帳に次のような感想を述べ、課題を記している。Animism は私にとっては星空の暗く輝く darkness こそが、animism だと思う。Spirit は良でも悪でもない。自然のなせる業である。したがって、人類はこれに ecological に対応すればよい。自然は意思を持っているわけではない。人類にとって良いことも、悪いことも、意図されたことではない。人類はそれを甘受、抵抗、あるいは活用してきた。月、星空、日の出、日の入、これらが象徴するシーンが animism だ。自然＝カミに意思はないと思う。すべてなるべくしてなる。トトロは「コッワイー（でも、抱きついてみたい)」存在で、子どもの時にしか会えない、自然、animism の象徴だ。そうでしょう？　自然を畏れるが、私たちは自然に抱かれることを望んでいる。Himalayas にはカミガミが住み、容易に近づけない怖い所だが、遠くからその美しさを見ることはできる。日の出、日の入の山容、色調の美しい変化は決して見飽きないし、心洗われるシーンである。

余談をさしはさむが、私は中央アジアの雑穀再調査の下準備を企図し、1996 年の在外研究の帰途、ウズベキスタンのタシケントによる予定であった。出発時に日本にウズベキスタン大使館はまだなく、事前にヴィザを取得できなかった。ところが、その後東京に大使館ができたので、在インド・ウズベキスタン大使館は、東京で取得せよといって容易にヴ

ィザを発給してくれなかったので、一週間ニューデリーにいて交渉し続けたのである。ちなみに、在ウズベキスタン・日本大使館の好意で直前になって発給され、現地空港には館員の方が出迎えてくださった。

このため、クマオン・ヒマラヤ調査の後、予定外の時間をニューデリーのホテルで過ごすことになり、他になすこともなく、大著“The People of India”を読み始めたのだ。90年ほど前の本だが、caste、tribe の問題と、animism の問題について詳しいようなので、この 2、3 日で読んでみた。500 ページのうち 200 ページは付録である。Ethnic group の身体的数値、写真とその分布についてまとめてある。まだ、イントロと資料を概観しただけだ。カーストは単に４分されているのではなく、職業と ethnicity と複雑に絡んで、3000 以上とも言われている。Tribe と雑穀の結びつきなど、何か記述があると面白い。Coinbatole では雑穀の paste を食べているとあったが、おねりのことであろうか。アニミズムが何なのか、その対象とか、構造、農耕との関わりなどがあれば面白い。アニミズムは重要な point になるだろう。Ayurveda も読む必要があるかな。焼畑との関わり、Gondo 族は訪ねたはずである。今まで ethnic groupes については詳しく触れられなかったが、なんらかの関係性が認められるとよい。

ところが、The People of India を読んでいて、tribe と雑穀との関係を見ようと思ったが、ほとんど記載がない。Animism のところは続けて読んでみるが、何か新しい視点が得られるかどうか。サイクロンが来ているので、６日のフライトはどうか。問題ないとよいが、せめて Bangalore には早く帰りたいものである。Delhi 駅の汽笛がよく聞こえる。ここから各地に列車が１－２日がかりで行くのであろう。身体の形態と社会関係、婚姻のことが中心であまり面白くない。Animism がどう展開されるかだが、100 年前の本でどんなものであろうか。農耕とのかかわりが出てくればよいのだが。Fetishism、Shamanism と animism のところは面白そうだ。Caste の起源は飛ばし読みした。残念ながら、食べ物と caste の関係が重要だといいながら、ほとんど具体的な記述がなかった。

Animism も原始的宗教とのとらえ方が強く、面白みがなかった。しかし、インド全般の tribe をとらえる一般的引用としては使えると思う。偏見なく、科学的とは言うが、やはりキリスト教的な立場であろう。婚姻が caste の形成、複雑に重要な役割をもっているので、関心のある人には面白いかもしれない。

2.5　多様を極める言語

Risley（1915）による 1901 年の国勢調査の報告では、インドの人種は、ドラヴィダ型、モンゴル型、インド・アーリア型、トルコ・イラン型、モンゴル・ドラヴィダ型、アーリア・ドラヴィダ型、スキタイ・ドラヴィダ型の 7 種に大別され、その各々は、さらに数十に細別されるという。このように言語はとても多様性に富み、現在インドで、母語として用いられている言語は 1652、10 万人以上が使用している言語が 83 ある。全人口の 96%を含むための言語は 23、おおよそ 1000 万人が使用している言語は 15 ある。大まかに見ると南部はタミル語のほか、カンナダ語、テルグー語などトラビダ諸言語、北西部はヒンドゥー語、ウルドゥ語などインド・アーリア諸言語、東部はシナ・チベット諸言語を用いており、さらに中・東部にはオーストロアジア諸言語を用いる民族が点在して居住している。（Johnson, 1983）。サンスクリットとタミル語は古典的な言語であるが。先史時代の大まかな言語グループの移動と有史時代の歴史によって、混沌を極めた言語もおいおい 15C 頃には確立されていった（Bellwood, 2005）。

実際にインドで暮らしてみると、ヒンドゥー語やウルドゥ語がどこででも通じるわけではない。当然ながら、インド人同士でも言葉が通じるわけではなく、学校教育の普及によって、むしろ英語が最も一般的には役立つようである。フィールド調査でも、幾人もの地域住民の通訳を得ないと情報が得られないこともしばしばであった。大きな州はおおよそ言語集団によってまとめられている。例えば、カルナタカはカンナダ語、タミル・ナドゥはタミル語が主な言語で、テレビ放送や映画もヒンドゥーや英語ばかりではなく、それぞれの地域言語のものが上映されている。ちなみに、世界で最も映画を作っているのは、アメリカではなく、インドであると言われている。娯楽映画が多いが、とても精神性の高い秀作も鑑賞する機会があった。

2.6　まとめ

母なる地球は大海面上に出ている大陸も移動させつつ、寒冷化と温暖化を繰り返してきた。今日に近い世界地図ができた頃、5 大陸はそれぞれに特色ある気候をもち、南極大陸以外の大陸には半乾燥地が拡大した。ここに適応放散して侵入した生物がイネ科植物などであり、これらを求め群れで遊動する草食動物が集まってきた。イネ科植物にはほとんど毒がないので（例外はある）、種子は人類が食し、茎（稈）葉は草食動物が食む。現生人類は氷河期が終わる頃から、家族が生きるために狩猟・採集に加えて「栽培・飼育のまねごと」を始め、ついに 12000 年前には肥沃な三日月地帯でオオムギを栽培化して、農耕を始めた。尊敬する先達植物学者の一人、ハーラン（Harlan 1984）は実験考古学と称して、一粒コムギ野生種の種子採集を試みたところ、一時間で 1 kg ほど収穫できた。季節の移ろいを追って山地に登れば、三週間は採集を続けられるので、この期間で十分に一年間暮らせるだけの種子が採れると考えた。イネ科野生種の種子は今でも採集して、食用に供されている。

人間と植物の関係史の側面から見て、農耕文化基本複合、とりわけ栽培方法や加工･調理方法などに関わる民族植物学的アプローチによるフィールド調査は欠かせない。こうした資料からも栽培化と伝播を明らかにする多くの事例が見えてくる。アフリカ起源の 3 種の雑穀がインド亜大陸に伝播し、受容された後、シコクビエは南中国を経て日本にまで至っている。モロコシはトルキスタンと南中国を経て日本まで至っている。しかし、トウジンビエはトルキスタンや中国には最近まで伝播していない。インド起源の雑穀類はおおよそ広くは伝播せず、地域的な栽培に限定されている。これらの要因を究明することはこれからの関心事であるが、栽培方法や加工・調理方法の調査はこのことに解答を与えるひとつの手法となるであろう。

桑山（金編 2008）は「ネイティヴ」について次のように論じている。彼は事例として柳田国男と日本民俗学について批判しているが、柳田論については私も第 11 章で詳論したい。特に稲作単一民族説は敗戦後の農業政策を誤らせ、雑穀を衰微に至らせた原主因だったと考えるに至ったからである。

ラテン語の nativus を語源とする英語の native には、特定の場所に生まれ育った人間という意味がある。よって、「未開人」であろうが「文明人」であろうが、人は必ずどこかのネイティヴである。そうしたネイティヴが、なぜ先住民や「土人」を意味するようになったのだろうか。端的に言えば、欧米列強（および日本）の植民地主義にルーツを持つ人類学は、研究する者が研究される者より圧倒的に優位にあった。前者は植民者＝見る者＝描く者であり、後者は被植民者＝見られる者＝描かれる者であった。・・つまり、ネイティヴとは「もの言わぬ土着の民」である。このよう

に理解されたネイティヴの人類学には少なからぬ前例がある。

たとえば、1930 年代の日本で柳田国男を中心に確立された民俗学には、両方の要素が備わっていたし（柳田の『青年と学問』や『民間伝承論』を読むと、いかに彼が西欧人による文化研究の独占に反発していたかが分かる)、かつての大英帝国の植民地インドにも自文化の人類学には長い歴史がある。だが、いわゆるポストコロニアルの時代にあって、ネイティヴの人類学の登場には二つの大きな要因がある。西欧の学問的覇権に対抗するため、柳田はたとえ西欧の文献を参考にしても、それについては言わないという戦略を採用した。それは柳田を国内では独創性に富む偉大な学者に仕立てたが、彼の後に続いた民俗学者の目を内向きにし、日本の文化人類学を含むより広い世界との接点を失わせてしまったのである。柳田自身はフレーザーをはじめ当時の西欧の学問に精通していただけに、国内外で孤立した感のある今日の日本民俗学の現状は残念である。

インドにおけるこの 40 年間の雑穀栽培面積、生産量および輸出入量の変遷について、FAO（2005）の統計資料に基づいて整理した。モロコシを含む雑穀栽培面積は 1970 年代になって減少傾向になり、2000 年には半減したが、技術的発達の支えによって生産量は横ばい状態である。主食を緑の革命で導入されたコムギでまかなう方向付けが影響してきたのか、商品経済の中でいっそう雑穀の地位低下が起こったのか、厳しい環境下で農耕に従事する人が減り、都市に人口が流出して行った結果の栽培面積の減少を示しているのかもしれない。しかしながら、人口が 10 億人を超えながら、一層の都市集中は、生物文化多様性の維持にとっては好ましいとは言いがたい。最近の FAO 統計データ（FAOSTAT2013）に基づく傾向ついては第 11 章で改めて論考した。

イネはカリフ季 Karif 夏作に作付けされることが多く、主要栽培地域は沖積平野を中心に東インドから海岸線を南下してケララ州にまで及んでいる。ただし、ラビ季 Rabi 冬作の作付けは北・西インドではほとんど行なわれていない。雑穀類は一般にカリフ季に栽培される。これらのうちで最も多いのはモロコシでカリフ期には東インド以外において広く栽培されているが、ラビ季にはマハラシュトラ州からカルナタカ州北部、アンドラ・プラデシュ州南部まで、デカン高原の黒色土壌の溶岩地帯において作付けされている。次に作付けが多いのはトウジンビエでラジャスタンやグジャラート州の半乾燥地が主要な栽培地域になっている。第 3 に作付けが多いのはシコクビエで、カルナタカ州南部では重要な穀物となっており（Johnson, 1983)、この地域では数百キロを自動車で走っても、延々とシコクビエの栽培が続く。たとえて言えば、日本の水田地帯にヤナギが植えられているような景観が、シコクビエとパルミラヤシに置き換えたような景観を想像していただければよい。このほかに、サマイ、コドラ、キビ、アワなどの多数の雑穀類が各地で点々と栽培されている。

ラビ季の主要穀物であるコムギはパンジャブ、ハリアナ、ウッタル・プラデシュなどの諸州で重要であり、多く栽培されている。トウモロコシはカリフ季に大ヒマラヤの南麓からウッタル･プラデシュ、パンジャブ、ハリアナの諸州で比較的多く栽培されている。オオムギはコムギと混播されることも多いが、主要な栽培地域は大ヒマラヤ山麓、とりわけインド亜大陸に隣接するチベットである。なお、多種のマメ類がヒンドゥー教徒などの菜食主義における蛋白質食品の供給源としてとても重要であり、年間を通じて各地で広く栽培されている。

こうした現状は、歴史的に検討すると、一時的には大きく振れて変化するが、長い時間

軸で見れば、また揺れ戻して、歴史地理的な背景を維持していることがわかる。確かに不易の事象と流行の事象が、歴史を再創造していく。人間の歴史は同じことを繰り返しているように見えても、それでも自由や平等を含めて、より良く暮らせる社会、世界を希求して、進化していっていると考える。

私たちは金を食べているのではなく、栽培植物や環境文化を食べているのである。貧しいから雑穀を食べているのではない。それが文化だから、伝統だから食べているのである。環境：文化、伝統→多様性は豊かさ、肥沃さ、すなわち貧しさではない。辺境の地は伝統を維持している。都市化した地は伝統を失った。Tribal and marginal area が伝統を保持していることは、貧しさゆえではない。伝統を維持して何が悪いのだ。都市化するのが文明であるが、これは文化の支持を失えば、滅びる性質の物だ。文明は栄えるにつれて文化をないがしろにする物だが、文化を忘れた時に文明は衰退する。

ニューデリーの Hans　Plaza で読書しながら思索にふけった。野帳 1996 には次のように記している。一人で異国に長期間いるという孤独感というものは悪くはないものだ。21F のレストランから左手にコンノートプレイスが見える。変わらないようで少しずつ変化してきている。寂しさというのは、1 つはいつもの調査隊のメンバーが居ないことであろう。それはそれとして引き受けねばならないが、やはり一人で歩かねばならないということだ。小林央往がまとめ切れなかった仕事を、私がまとめて見せねばなるまい。(小林はマリ 1994 年の雑穀調査から帰国後、マラリアに罹患していたことが分からず、10 日もしないうちに大学病院で他界した。)

日曜日も午後 9 時を過ぎると、ニューデリーの中心地の明るさも落とされるようだ。オールドデリーの明るさが増しているようだ。ネオンの少なさは良いと思うが、排気ガスの汚さは何とかしてほしいものだ。朝 7 時に起きても、すさましいスモッグで、1～2ｋｍ先のデリー駅すら霞んでいる。バンガロールに戻って、このことを全インド雑穀改良計画の事務長に話した。彼は重ねて言った。インド人の優秀な人は皆、アメリカに行ってしまった。優れた人はそのままインドには戻ってこない。もう三流の人しか残っていない。特に政治家はそうで、ガンディーやネルーの時代までが golden　age だという。今の政治家は選挙と利権、金しか考えていないという。彼は吸入器を日に３回使う。穀物の風選のほこりにも反応するそうだ。Shashidal さんの娘さんもひどいし、かなり多くの人々が呼吸器障害を起している。大学での脱穀作業は 11～1 月いっぱいにかけて行う。正月は簡単な茶会を行なうようだが、あとは日々に変わりない。皆、平日どおり働いている。

伝統を再発見するとともに、新しい創造を加える必要がある。努力を怠ったら、伝統文化は衰退する。古くからの食も大切にし、新しい物を付け加える。イネ、コムギは便利でおいしいが、雑穀も食べようという態度であろう。雑穀研究会をもう少し活発にしたい。シタラムさんに原稿を書いてもらい、こちらで半分くらい編集しておいて、帰国したらすぐに出せるようにしよう。このように決意を述べていたが、この大望はいまだに果たせず、定年退職後 2014 年以降も、いまだに原稿を書き綴っているところである。

文献

綾部恒雄（2008)『講座世界の先住民族』、明石書店、東京

Bellwood,P. and C.Renfrew (eds). 2002. Examining the Farming/Language Dispersal Hyposesis, McDonald Institute for Archaeology Research, Cambridge, UK.

Goswami, B. 2003. Constitutional Safeguards for Scheduled Caste and Scheduled Tribes,

Jaipur & New Delhi, Rawat Publication, 89.
Harlan, J.R. 1984、熊田恭一・前田英三訳、作物の進化と農業・食糧、学会出版センター、東京。
金基淑編 2008、講座　世界の先住民族　―　ファースト・ピープルズの現在３、南アジア、明石書店、東京。
Lord, Maria ed. 2004. Discovery Channel --- Insight Guides India, Apa Publications GmbH & Co. Verlag KG (Singapore branch).
メトカーフ,B.D.・T.R.メトカーフ 2002、河野肇訳 2006、インドの歴史、創土社、東京。A Concise History of INDIA , Cambridge University Press.
Mutihiah, S. et al. (eds). 1987. A Social and Economic Atlas of India. Oxford University Press. Delhi, India.
佐藤圭四郎 1998、世界の歴史６、古代インド、河出書房新社、東京。
Singh, K.S. (ed.) 2003(1994). The Scheduled Tribes (People of India Series, Vol. III), New Delhi, Oxford University Press.
山折哲雄監修 1991、世界宗教大事典、平凡社、東京。
柳澤悠編 2002、現代南アジア④開発と環境、東京大学出版会。
柳澤悠・水島司編 2014、激動のインド第 4 巻農業と農村、日本経済評論社。
田邉繁子訳 1953、マヌの法典、岩波書店、東京。